

浄土

十月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受記録第三五二号)
昭和三十六年九月二十五日 印刷 昭和三十六年十月一日発行

第二十七卷

第九号

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

——御法語の栞り——

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 八、あとがき

B 6 版	十六頁
定 価	十五円
送 料	十円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上二・五割引	

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

◆ 信仰のめばえをつちかう ◆

——みほとけのおしえ——

よいこのいっしゅうかん

ひめくり式七曜表

B 5 版 九 葉

三〇円 一〇円

表紙画／のざわ ともかつ
本文画／おぎはら ひろし

日・てを あわせて

月・きょうも ニコニコ げんきよく

火・きそくを まもる

水・せいけつ せいとん

木・わになつて みんななかよし

金・よい ことば

土・よろこびと はんせい

・ねんじゅう ぎょうじ表

運動会の賞品に／稚児参加の記念に／年末の
施本に百部以上より貴名 行事記念の印刷
その他の御奉仕うけたまいます。

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 大道社

電話 八三三二V五九四四

振替 東京 八二一四七

浄土

十月号



写真は中央アジア・トルファン
(高昌)の古寺院から発見された
模様入り敷き瓦——大きさ約40㎝

いはんや往生をねがひ、念仏を申してわが心のはげしからぬ事をなげかむ人をば、仏もあはれみ菩薩もまもりて、障りをのぞき、知識にあひて、往生をうべき也。

法然上人御法語

浄土 十月号 目次

表紙……菩薩半跏像(奈良 岡寺)

こころを浄める……………佐藤良智……(二)

お十夜の話……………阿川文正……(一四)

赤い羽根の運動……………鶴飼俊成……(二〇)

随想 真居……………安居香山……(八)

仏法の味に親しむ……………藤井実応……(二三)

近代高僧伝 白旗辨智……………大橋俊雄……(二四)

童話 いたずら……………にはしすすむ……(二八)

中国綺談 妄語のいましめ……………牧尾良海……(三三)

実話 お腹の収縮……………吉野翠幹……(三六)

慈悲と喜捨……………(三三)

無数の機縁……………(二七)

禍福は姉妹……………(一九)

愚者は匙の如し……………(一五)

現在を大切に……………(一四)

七ふしぎ放談……………(三二)

十月の暦から……………(一八)

扉の御法語……………(一七)

会員だより……………(一五)

聖典 講義 特急「ごくらく」行……………竹中信常……(三六)

あとがき……………(四二)



こころを浄める

—— 倫理を超えた上人 ——

佐 藤 良 智

仏教は世間の教えであるか、それとも出世間の教えであるか。それは世間の教えであると共に、出世間の教えである。世間の教えでなければ、われわれに干係のないものである。それと共に、出世間の教えでなければ宗教ではない。宗教は永遠なものにつらなるものであると同時に、限定された人間にかゝわるものである。仏教はまさしく、宗教である。

世間には、倫理がある。倫理は人と人との連関の上に成立するものである。未開の人間社会にもなほどうかの掟があろう。その掟は、倫理につらなるものであろう。進んだ人間社会には必ず倫理・道徳が存在する。倫理・道徳が高ければ高い程、その社会は進んだ社会と言えよう。倫理と道徳の区別など考えるのは今の目的ではないが、結局は同じものであるが、前者は、なにほどこ原理的なもの、思

案の加えられたもので、道徳と言え、具体的な実践的なものである。

仏教を単的に表現することばとして、七仏通誡の偈というのを重んずる。確かに仏教のめざすところを簡潔にあらわしている。即ち、

もろもろの悪を行ふな
善を行え

そして、自分のこころを浄くせよ

これが諸仏の教えである。と。

この初めの二句は善悪という倫理の価値規準を表明している。これを見ても、仏教は倫理を明確にみとめるものである。この場合に於ける善悪は明かに倫理の常道であるものを認め、この価値を認めないものは仏徒ではないのである。仏徒の第一条件は、廃悪修善である。この世間的倫理

を完うすることによって、信徒たる本分を先づ満すのである。近時、この国の社会風潮として、倫理・道德を軽視する傾向がみられる。これは、科学尊重の世界的傾向がわが国にも現われ、倫理・道德が何か前世紀的香りをもち色彩が薄くなったがためであろう。それと他面、宗教軽視のムードが確かに存在する。宗教と倫理は隣り合せにあるものであるから自ら倫理が軽視される傾向がでてくるであろう。近來初等教育に於いても道德教育を重要視してきたようであるが、何となく社会のくづれが感知される。道德倫理軽視の傾向は又更に、道德の規準に多少の動揺があったことにも起因するであろう。戦前に於ける国民道德のなかには基本的に戦後と異なるものがあつた。高度の国家主義によつた戦前戦中の国民道德には歪みの部分があつた。これがゆらいだことに道德軽視の起因の一つが数えられる。といった道德倫理は揺ぐものであるか、との問題がある。これは時代と場所によつて異なるものと、時間や空間にかゝわらず不変のものとが考えられる。現在に於いては、共產主義を奉ずるものと、自由主義を奉ずるものとその道德の徳目に於いて異なるものがある。しかし、右者即ち、時空に制限されないでその徳目を永遠にかゝやかせるものが存在する。諸仏の教えはそのような善・悪なのである。仏教に

は社会人の守るべき五つの誠めがある。知られるように、一つには、「生きものを殺すなかれ。」仏教は慈悲の教えであるから、「生きものをみずから害すべきでない。また他人をして殺さしめてはならない。また他の人々が殺害するのを容認してはならない。」人を殺さないことが第一であるが生きものの一切を殺さないことがその理想である。

この徳目一つあげても仏教倫理の普遍性と眞実性が価値高く評価される。

第二は、「盗むなかれ。」「与えられないものは、何ものであつても、またどこにあつても、知つてこれをとること勿れ、また他人をして取らしめることなく、他人のものを認めることもなく、すべて与えられないものをとつてはならない」と。

第三は「邪淫を行うなかれ。」「知者は姪行を回避せよ。赤熱せる炭火の坑を回避するように。もし不姪を修することが出来なければ、他人の妻を犯すこと勿れ。」

第四は、「偽りを言う勿れ。」「集会に赴くも、群衆のうちにいるも、何人も、他人に向つて偽りを言つてはならない。また、他人をして偽りをいわせてもならない。他人が偽りを語るのを容認してはならない。すべて虚妄を語ることを避けよ」と。

第五は「酒を飲むなかれ。」「飲酒を行ってはならない。

この不飲酒の法を喜ぶ在家者は、他人をして飲ましめてもならない。他人が酒を飲むのを容認してもいけない。これは終に、人を狂酔せしめるものであると知って——」

この五つのうち前の四は特に、「四つの業の垢れ」とも「四戒」とも言っていてインドの他の宗教即ちバラモン教やジャイナ教などとも共通であって仏教に於いても最も大切な徳目とされるのである。時空を越えたもの、即ち人間として本質的に避けらるべきものとするのである。これを実践することが善であり、これを破ることが悪なのである。この徳目を守ることが仏教のしるしなのである。後世に於いて仏教々団が発達し教団の規律が戒律として完成して行ってもこの五戒は変わらないのである。性戒と術語をもって表現しているが、時空を超えた仏教倫理の徳目なのである。釈尊が御臨終近くに弟子達に対して、自分が定めた戒で小戒は破棄してもよいと申されたと伝えるが、この少々の戒とは仏教々団の守るべき戒律であって、仏徒としての本質的な実践項目は断じて破棄せらるべきではないのである。釈尊の滅後、年月が経過して仏教倫理の徳目が教団倫理と混交するようになってその特色が薄らいだのであるが先学の指摘されるように不要なるべき仏教倫理項目は戒であっ

て、仏教々団の規律は律とよばれこれを区別されなければならないのである。この純正の仏教倫理項目は、後に、十悪・十善として、身と口と意のわれわれの行為全般に涉って倫理規定を行うのであるが、前の五戒の項目の中不飲酒を除いて、「偽りを言うなかれ」を更に詳細に分別して妄語・悪口・両舌・綺語に分ち意の行為として、むさぼり(貪)いかり(瞋)ぐち(愚痴・邪見)を加えて十を数えるのである。これの実行が悪で、これの不実行は善なのである。この仏教倫理の徳目は大乘仏教に至る迄一貫し堅持されるのである。これによって、初めに引用した、「諸の悪をなすなかれ、善を行へ」との仏教々理大綱は時の流れがいかにか大きく転じても横転はしないのである。

さて、七仏通誡の偈の言葉は注目されなければならない前述の前二句は仏教倫理が世間倫理と交錯するところである。次の句即ち、「自らその意(こゝろ)を浄くすること」という言葉である。倫理の根源に肉薄するものであつて、半ば倫理の領域に属し、半ば倫理の領域を飛躍するものである。何処に飛躍するかと言えば、宗教としての仏教に連関してくるのである。

宗教としての仏教は、転迷開悟を目的とするものある。迷いは、意(こゝろ)の垢るゝことによって現起するので

ある。この垢穢を滅することによって悟りが開かれるのである。廃悪修善は「こゝろ」を浄める手段なのである。前提条件なのである。それ故にこの飛躍は仏教倫理と密着す

愚者は匙の如し

愚かな人は賢い人に交わってもちょうど匙が味を知らないやうに、賢い人の示す教えを知ることができない。

匙はお砂糖の中にあっても、お塩の中にあっても、甘いとも辛いとも思わない。林に入っても薪を見ないという通り、愚かな人は賢い人に混って交際しても賢い人の語る教えを耳にしても何一つ自分のものとすることができない。猫に小判という喩えの通り、どんな価値のある言語の行動も、その価値の解らない人にとっては瓦石同様つまらないものである。人生のこと、芸術その他、何んでも誰も自分の理

解程度にしか解らない。どんな愚かな人も、自分では立派なものだと思っていることを忘れてはならぬ。賢者といい、愚者といっても、これは学識の深い浅いということでない。他の人々の間から優れたものを探し出す人かどうかということである。また常に反省することに努めているかどうかによって定まる。他人のどんな言葉もよく耳を傾け、他人の立場を理解し尊重し、常に何かを学びとって、自分の身につけようとする人は、賢者への門に第一歩を踏み入れ人である。逆に、他人を軽んじ自説を固執する者があれば、その人には賢者への門は遂に開かれない。かゝる人は心のうつろな他人から孤立した人である。

るものなのである。換言すれば、仏教倫理の完成は、「自浄其意」（そのこゝろを浄めること）によって初めてなし遂げられるのである。「自浄其意」が「廃悪修善」の根源なのである。それ故に宗教としての仏教が世間道徳である「廃悪修善」の背景であり、根源なのである。飛躍は飛躍のようみえて実は離れることのできない連関にあるものである。この故に仏教はこの世間に欠くことのできない存在なのである。

浄められたる（こゝろ）は、転迷開悟された「悟り」の内容をなすものである。これが、大乘仏教に於いて自性清浄心となり、仏性となり仏心となり、涅槃となり、真如と呼ばれるものなのである。出世間のものなのである。

飛行機に乗って雲海を出ると下界はみえないが雲上は太陽が輝ききらびやかな世界が展開するという。こゝで大乘仏教のゆゑしき仏教哲学がきらびやかに展開するのであるが、ともすれば、おみ足のないみ仏達が観念の雲の上をとびかわされることになるのである。

現実の仏教々団は社会から浮きあがった存在となり、世間の指導であった仏教倫理の要諦は教団のなかに閉ぢこめられて形式化され図式化されてしまった。

大乘仏教の倫理運動項目として三聚浄戒（一、摂律儀戒

二、摂善法戒・三、饒益有情戒）が説かれ、仏教本来の面目を発揮しようと努められたが、これも特殊教団内にあってその実力を発揮せず単に伝承を尊ぶにすぎなくなった。

又いろいろ形而上学を好む宗旨がひしめいてゆゝしい学者が輩出していたが、生きた人間を救う宗旨はなかった。

この時に世に生れ給うたのが法然上人であった。法然上人は鋭い智恵の眼をみひらき、丈夫なおからだにものを言わせて、学者聖りをめぐり、また修行にもはげまれた。円頓戒と言われる大乘の戒、即ち大乘仏教倫理の伝統も継がれて戒にも、のぞみを托して御精進の日が続いた。木曾義仲が京に乱入の日以外は一日として聖經を目から離されたことが無いと伝えられている。それ程の御精進も上人を救う教えがなかった。黒谷の経蔵に閉じこもって聖經を繙かれるに善導大師のおみちびきによって浄土の門にたどりつかれた。

自分は、まことに「罪惡生死の凡夫であって曠劫よりこのかた出離の縁がない」ものであるという自覺に達せられあみだ如来のおすくいに摂取され給うたのである。

こゝでわれわれは最初にあげた七仏通誠の偈にかえって考えてみたい。廢惡・修善・自淨其意が仏教であるとすれば、法然上人は仏教以外のものによって救済されたことに

なるのであろうか。

上人は言はば仏教倫理からの脱落者である。なぜならば、罪惡生死の凡夫であって戒律を保つべき器ではないという自覺に達せられたからである。しかしながら自らは円頓戒の伝承者であり、持戒堅固なる聖僧である。そのお言葉のなかに、「小戒をも犯かさず」とこゝろがけて念仏せよとある。

命をかけての仏道修行の極に於いて、即ち、仏教倫理の實踐の極に於いて、この倫理を超えて絶体者、弥陀の慈光に摂取されたのである。初めから仏教倫理の否定者ではなく、大肯定者である。（円頓戒の伝承者であるということがよくこれを証明する）仏教倫理の真面目な實踐者、いのちをかけての實踐者でなかったならば、罪惡生死の自覺が恐らくなかったであらう。罪惡生死の自覺がなかったなら弥陀への絶対帰依がなかったであらう。単に觀念の信徒であるならば、人間法然上人の救済は實現しなかったであらう。

上人は仏教の倫理を尊重しつつ、これを超えたもうた。仏教倫理を超え、弥陀の慈光に摂取された上人には、再び念仏の光のなかに一々の倫理が輝いているのでないだろうか。

（大正大学教授）

扉の御法語

日ごろ十悪五逆をつくれるものも、臨終にはじめて善知識にあいて往生する事あり、いはんや往生をねがひ、念仏を申してわが心のはげしからぬ事をなげかむ人をば、仏もあはれみ菩薩もまもりて、障りをのぞき知識にあひて、往生をうべき也。(十二個条問答)

ある人が上人にこうお伺いしました。

「私もまた同様に往生を願う者であります。が、さう思いながら、フト気がゆるんでいふことに気がつきます。またお念仏は尊いもの、阿弥陀さまの本願は有難いものと存じていますが、ついついお念仏を唱えないままに日を暮してしまふことがあります。こんな具合ですから、とても三心具足(至誠心——真実の心、深心——ふかく信ずる心、廻向発願心——一切の善いことを皆往生極樂のためにふり向けようとする心、この三つを兼ねそなえて日日を送ること)しているとは申せません。ですから私如きものは往生はできないでしようか」

これに対して上人は、いつもながら優しく訓されました。即ち「浄土をねがえどもはげしからず。念仏すれども心のゆるらかなる事をなげくは、往生の心ざしのなきにはあらず」といわれ、例えば急ぎの用事のある人だからこそ足が遅いと思うのであって、急がぬ旅なら何も車が遅いとか、時間がすぎたとか心配する気にならぬと申されました。

つまり真面目に生活し、本気で反省する人なればこそ、これではいけないと考えて行いを改め、己が非力に鞭打って努力し、自然と発展し、向上してゆくわけであります。もし生来の怠け者であつたら、ブラブラ時間を空費し、手足の労力をいとしていても、自分では何んとも気がつかず、よいとも悪いとも考えず、徒らに日が暮れてゆくことになります。

上人にしてみれば、こうして歎き、悩み、そして相談にくる人は、まことに縁の深い人であつて、念仏行者に相応しい人に思われました。従つて決して叱ることなく「漸々に増進してかならず往生すべし」と訓されました。そして更に言葉を続けられたのが、この御法語であります。

平常はとんでもない生活をし、他に迷惑をかけ何一つ賞められる様なことのなかつた人でも、しかもいよいよ臨終の最後の時となつたにしても、善知識があつて、ともどもお念仏を唱えることができれば、必ず往生できます。即ちぎりぎり一ぱいの所にきてしまったにしても、仏さまは決して見捨てないのであります。ですからいよいよ最後の一瞬でもよいから心から懺悔し、仏さまの本願を信じ、お念仏を唱えることができれば往生できます。まして平常から往生を願い、お念仏を申している人なら、たとえ合間に心がゆるみ、うっかりすることがあつても、仏菩薩さまは必ずお守り下さるというのです。

上人は無理なこと、その人にとって出来ない相談の難題を申されません。もっと奥深いその人の心のうちを見通され、且つ尊重されています。そこで上人は別のご法語で、「日に六万または七万とお念仏を申すつもりでもつい真剣さに欠け、新鮮さがうすれてくるものである。忙しくてつい日課が果せないこともある。ここに別時のお念仏を勤めることの意義がある」と申されています。七日間の別時念仏をすすめるわけがここにあります。



随 想

真 居

安 居 香 山

或る私の親しい友人に男の児が生れた。其処でどんな名前をつけるかについて、話し合っている中に、父親の名前もそうなので、下に「居」の字のつくのにしたいから、何か適当なのを探して欲しいと頼まれた。私は二つ返事で承知した。と言うのは、中国には佩文韻府と言って、熟語を下の字で引ける便利な辞書に類したものがあつたからである。

早速、家に帰って韻府を拡げてみたのであるが、仲々に思わしいのが見当らない。時には成程と感心したり、思わず吹き出してしまつたりした。とても名前に出来ない様な熟語がたくさんあつたからである。

穴居 離居 化居
群居 隱居 茅居

皇居 夜居 幽居
麋居 雜居 寓居
神居 別居

先ずいくつか拾つてみてもこんな状態である。聊か困惑したのであるが、それでもいくらか名前になりそうなものを拾つて、私意を加ふることなく十程並べて送って置いた。

幾日か経つて、大変丁寧な礼状が来て、中から「真居」を選び、これを「まおり」と読ませることにしたから、その出典を教えて欲しいと言つて来た。佩文韻府には、その出典が幾つか示されている点でも、又便利な本である。急いで開いてみたら、次の様な出典がたった一つ示されて居た。

張伯雨詩、「葛洪井上訪真居」

十月の暦から

十日 眼の愛護デー ものごとの大切な点を「眼目」というように、眼の大切なことはいふまでもない。誰でも注意して欲しい点をあげると、一、眼球に触れたり、擦ったりせぬこと。必要ならば脱脂綿の小片を水か二%の硼酸に浸して軽く拭く。二、朝夕清水で眼を洗うこと。ただし強く擦ってはならぬ。三、眼に塵か虫が入ったら、多少病んでも我慢して眼を閉じていること。四、特別の場合の外は紫外線除け眼鏡をかけぬこと。五、身体の栄養に留意し、ビタミンA Bの欠乏を防ぐ。六、身体を健康を計る。新鮮な空気と日光が大切。七、眼の過労を防ぐ。映画やテレビを長時間みないこと。八、鉄片等のささった場合はすぐ医師の診断を受ける。いわゆる「そこひ」は眼の内部の疾患、眼底病の総称。その種類も多く、治るものと治らぬものとある。脚気からくる網膜炎は昼盲症といい、明るい所だと却って見にくい。先天性で色素斑が現われ、次第に視野が狭くな

所が、この張伯雨なる人が如何なる詩人であるかも、又この詩の全体がどんなものかも調べてみても一向に分らない。幾日かたつ中に、又友人から督促が来た。兎も角、何とか返事をせねばならぬので、兜をぬぎ、この七言を解釈してみることにした。

葛洪は、六朝時代に、抱朴子と言う道教の根本聖典とも言ふべきものを著わした人で、自からも又神仙道術を修めた道教の代表的人物である。

次に「井上」とは「井戸のほとり」とでも言う意味であろうか。所で易経には「井」の卦があり、それには次の如くある。

元吉、上に在り、大いに成る。

これの注釈書である周易正義には、この事について、「能く元吉を獲る者は、ただ井の上に居る。井功大成す」としている。これよりするとき、「井上」には誠に結構な意味が含まれていることとなる。

次に問題の「真居」であるが、これは「真人の居」とでも言うことらしい。漢代の許慎の書いた説文と言う字引の中に、「真とは、仙人形を変じて、天に登るなり。」

とあるのがそれである。従つて「真居」は、又「仙居」とでも言い得よう。其処には、不老長寿の仙人が住んでいるのである。

此処まで解いた私は、次の様な結論を友人に書き送つて、難を逃れることにした。

以上の様な所から解釈すると、この一句七字は、「葛洪が井戸のほとりに、仙人の居処を訪ねた」と言うことになるのですが、この一句の中に、「元吉、大成をあらわす井戸のほとりに、不老長寿の仙居を求め訪れる」と言う結構な意味が托され、「真居」と言う名前にされた事は、此の上無くよい事であつたと、今更ながら喜んでいます。

この最後の喜びの言葉は、偽りの無い私の言葉ではあつたが、この一句を解することの中には、仲々の苦心があつた。然し、この解釈は、決して不当なものとは考えていない。

○

一体、中国に古くから流行していた神仙思想とは、仙人となることに依つて、延命長寿を得ようとするもので、やがてこれは、後世の道教思想の大きな要素となつたものであ

り、遂に失明するものがある。その他悪質のものに、結核や性病からくるものがある。病原により種々な病状を呈する。

十二日 芭蕉忌 本名を松尾甚七郎といい父は与左衛門、正保元年伊賀の上野（又は拓殖）に生れた。城代藤堂新七郎に仕え宗房と号し句作を北村季吟に学んだ。寛文十二年江戸に下り、関口水道工事に職を奉じたが、門人鯉屋杉風の後援によつて、深川六間堀に庵を結んだ。宗因の檀林派の人々と交遊したが、遠く万葉集の自然を魂とし、近代の生活を取り入れて一風を創始した。貞享元年初めて旅に出た。

十四日 鉄道記念日 明治三年鉄道を開始し、同五年七月新橋横浜間二十五軒の線路が開通し、七年五月大阪神戸間、十年二月京都大阪間が開通した。私設鉄道は明治十四年日本鉄道株式会社が創立され、上野青森間及び上野高崎間の線路を完成した。明治四十年法律によつて全国十七会社線路を買収して全国鉄道統一の方針が定つた。その後は補助線のみが民営鉄道ということになった。鉄道を国有とする大方針は明治五年以来定つてい

る。彼の有名な秦の始皇帝が、最高の権力者となつて、最後に求めたものは、延命長寿であり、従つて、神仙となることであつた。彼は多くの財産と人々を犠牲にして、蓬萊山に仙薬を求めたのであるが、終にこれを得ることなくして死去し、又彼が理想とした一世、二世より万世に及ぶ大国の形成も、僅か三十年足らずで亡んだことは、有名な話である。歴史の皮肉と言うものである。

仙居を訪れた話は過去のものとなり、始皇帝があれ程までに求めた仙薬は、今日では近代医学の産物である諸の薬や、治療により、いくら人間の願望を満すことができるようになった。言うなれば、仙術仙薬は、今日の医学に依つて、いくらその目的に近づきつつあると言えるのである。

○

然し、延命長寿を得んとする願ひは、単に中国人のみの考えでなく、生きとし生ける者が誰しも願わずにはいられない本能的欲求である。今日の医学の發達は、こうした欲求が積み重ねられた結果の賜である。そして、今日では、癌と心臓病を除いては、「不治の病」は無くなったとさえ言われている。結核の如きは、もう過去の病気である。武夫と浪子の悲歌も、今は歴史的産物となつてしまった。

「人生僅か五十年、花に譬えば朝顔の、露よりもろき身を持ちて……」等歌われた御詠歌の哀調も、今は、七十八十を以て数えねばならぬ。誠に有難いことと言わねばならない。葛洪が神仙術を修め、延命長寿を求めて、

然し、私は近年この医学に対して大いに不信の念を抱いている。と言うのは、近年理由の分らぬ背中の痛みを覚えた事が原因で、多くの病院や医者の間を右往左往する結果となり、つまる所、各人各様の診断と治療を受けたのであるが、一向にその病名さえ分らぬとともに、痛みも相変らず変りが無いからである。

始めは胃から来る痛みと言われ、さては癌かと驚き、全くノイローゼとなり、「癌の話」を熟読玩味したりして、食物も咽喉を通らぬ程であつた。お蔭で癌の知識は随分と豊富になつたのであるが、書いてある症状が総て私に的中していると思われ時などは、悲し

たが、明治三十九年の鐵道国有法案には「外人による私設鐵道株の買占と鐵道の外人による制御を防止」することが明示されていた。

二十日 夷講 家内に夷子神を美々しく祀り、無礼講の祝い酒をだす。また夷子神には必ず鯛を供え、お客を招いて盛宴を張る商業の繁昌を祝う祭日である。余興に「夷子講の売買」というのがあり、何んでもそこにあるものに価を付け、千両とか万両とかけい気よく価をとえ、それで売買を取極めて一同拍手のうちに縁起を祝う。出入や下人が講を組んで祝物を持ってくるので夷子講の名がありまた誓文払とも称えた。

二十二日 十三夜 十五夜の名月に対して十三夜を後の月という。十三夜の月見は我が国から始つたもので、延喜十九年のこの夜、内裏で月の宴を催したのが最初である。また宇多法皇がこの夜の月は無雙であるといわれたことから始つたとの説がある。この夜は芒を供え、団子衣がつき、栗、生柿、枝豆を供えるが、関西では塩うでの豆だけを供えて芒を供えない。ただし現在は月を賞でる家も少なくなつた。

い限りであつた。近代人の——私もその一人であると思つてゐるのであるが——弱さと言ふものであらうか。事実、或る医者は、胃潰瘍と判断し、早速、手術すべきことを奨めたのである。然し、他の医者は、それ程まででないと言ひ、又或る医者は、胃は健全であると言ふ。

薬をも掴みたい気持ちでゐる私は、一喜一憂すると共に、正に右往左往した。結局する所、背中の痛みは、脊髄の変形より来るものである事となり、その治療を受ける事となつたのであるが、これ又各種各様で、一向に効き目がない。神経を病みすぎるからいけないのだと言われ、丹田を練るべきだとまで言われた。丹田とは臍下一寸五分の所であり、この修養に至つては禅であり、道教である。事已に此処まで至つたのである。

こんな時には、誰にでもこの苦痛を訴え、教えを請いたいものである。そして、そんな間隙に、邪教の手が待つてゐるものである。幸い私は、浄土門徒のはしくれとして、其処まで行かずに止まつて、近代医学の優位を信じつつ、治療に専念してゐるのであるが、こ

うした事は、私に医学に対する不信の念を抱かせる事となつた。病める者の共通の心理であらうか。

○

此の世に生を受けた者として、長寿健康を願わぬものはない。病院や医者の間を巡礼するのは、その為である。然し、考えてみると医学が如何に発達したとしても、未だ末だ總ての病気が克服されたわけでない。まして、誰しもが七十、八十まで生きるとは限つた事でない。現に今の今でさえ年若くして世を去りつつある人々がある筈である。限りある命とは、正に宿業に依つて、定められたものであらうか。ただ、その限りに於いて、最後の瞬間まで、よりよく生きるのが人生であると言へるかも知れない。

かく諦念すれば、すべてそれで解決する筈であるが、それでも私は、「真居」を訪れて長寿を求めるや切である。そして、彼の友人の男児と共に、葛洪にあやかつて、神仙たる事を得て、長寿を全うせんと願うものである。凡夫と言う外ない。

二十三日 電信電話記念日 電信は一八三七年米人モールズによつて發明され、それから十八年の後、一八五四年にベルリが電信機を幕府に寄贈した。しかし幕末の物情騒然たる時なので、この利器に対して顧みるものもなく放置され、明治二年八月に横浜灯台と横浜裁判所間に電信線を架設したのが始まりであつた。同年十二月には横浜、東京間に公衆通信の取扱いを開始した。當時は電信を切支丹の魔法として建設工事を妨害し、局舎を破壊した。熊本神風連は電信の下を通るのに、扇を頭にかざして通つた。明治三年八月には大阪神戸間に電信が開通した。明治六年八月東京汐留に修技学校を開設した。

電話は明治十年十一月に輸入されたが、しばらくは學術試験用か官庁相互の専用通信であつた。明治二十一年十二月東京、熱海間に電話線を架設し実験し、更に静岡に延長して好結果を得た。明治二十三年十二月十六日東京及び横浜で電話交換業務を開始した。その時の加入者は東京一七九、横浜四五にすぎず明治二十六年三月大阪及び神戸に交換を開始したが、大阪一四二、神戸七四の加入者しかなかった。



食事は生命の糧

仏法の味に親しむ

藤井実応

食欲の秋とも、天高く馬肥ゆる候ともいいますが食物が足りなくて病気をすることは極く少く、食べすぎて病気になることが多いのに注意しなくてはなりません。故西勝造先生の「満腹のたのしみよりもお腹のすいている楽しさを味わうように」という心がけが大切です。また水野南北先生の「南北相法修身録」によりますと、次のように記されています。

命があれば食はあり、食があれば命がある。命は食にしたがうものである。それゆえ食は命を養う本で、生涯の吉凶禍福は悉く食から起る。ただ恐るべきは食である。つつしむべきは食である。粗食（菜色）と小食は人間幸福の基本条件である。これを守る人は運勢が開けてくる。食物をむだにして暴飲、暴食するのは禍の本で、そのような人は運勢がわるくなる。南北先生は徳川末の相法の大家で、人の運勢をみるのに食事のことを併せ考えるならば百発百中だと申しています。

食物は生命の糧であり、一日も欠くことができません。よって八万四千の法門ありといわれる仏法の中で、「食を以て第一とす」といわれるわけがここにあります。仏教では食に四食ありと説いています。四食とは

一に段食といえます。形ある食物のことで肉とか

野菜とかの普通の食物のことです。

二に触食といえます。喜悅の情を起すものの感触によつて身を支えることです。即ちよい音楽を聞くとか、よい書画を鑑賞するとか、よい香をかぐとかのことです。

三に思食といえます。思想とか希望とかいうものによつて身を支えることです。

四には識食といえます。物を分別し、識別し、または考え等して心の力によつて身を支えることです。要するに心身を養うものが四食で、われわれは毎日この食物を頂いて生命を養っています。このように仏教では身の食物とともに、心の食物を説いているわけで、この点に留意して日々心の食も頂くべきであります。

身心の食を頂いて生命を養うのですから、食事をすることは仏教の大切な儀式の一と申すべきであります。僧堂において食事作法がなかなか厳しいのも当然でありましょう。食事の前後に合掌読経反省が行われます。仏教徒として時に五つの反省をするとはよいことでもあります。これを五観といい、次のような五つであります。

一には、この食物が食膳に運ばれるまでには、幾多の人々の労力と如来の加護によることを思うて感

謝します。

二には、私の徳行の足りないのに、この食物を頂くことを過分に思っています。

三には、この食物に向い、うまいからとて貪る心を、まずいからとて厭う心を起しません。

四には、この食物は私共の身心を療す良薬と心得て頂きます。

五には、この食物を頂いて人としての誠の道をふみ行うことを誓います。

この五つの反省の外に、一切の悪を断ち、一切の善を修し、人々を導じて共に仏道を成しとげようと誓います。こうした食事の作法や心得は大切なことですが、実際になかなか実行できかねるので、私共は

「ほんとうに生きんが為に、今この食事を頂きます。与えられた天地のめぐみを感じます。頂きます」

と合掌してとなえ、箸をとることにし、そして食事が終わったら「御馳走さま」ということにしたいものです。更にもっとしほって行くには、念仏を称えて食事を頂き、食事を終って念仏することにしたものです。要は感謝の心を忘れぬことです。栄養の点を考える

のはもちろん大切ですが、感謝の心を忘れてはなりません。

法然上人は「逆修説法」に「われわれは食べて命をつづけてゆくのであるから、食を人に与えることは則ち命を与えることである。また不殺生戒を持つのは、衆生の命を助けることである。故に飲食を生きとし生けるものに施し与え、慈悲の心に住して不殺生戒を持つと、必ず長命の果報をうるものである」とあります。布施と不殺生戒は仏陀の大切な教えです。自分はまづい物を食べ、子供においしい物を食べさせる母の心をお手本としたいものです。一家にあつては「食平等」といい家中が同じ御馳走を頂くことがよいのです。他から珍しい土産ものや食物を頂いた時にはみんなで分けあい、隣近所へもおすそわけして頂くことが一番の喜びで、一人だけおいしいものを食べて他に与えぬのは餓鬼であります。道は近きにありといえます。手近な日常の食事の上に仏道があります。

天親菩薩の「往生論」に、極楽に生れた人々のすがたを説いた最初の方に「極楽に生じた聖者は、仏法の味に親しみ、

禪三昧を食となし、身心の悩みは永へに離れて、常に楽しみを受く」

とあります。仏法の味とは、法にめざめる喜びです。天地の限りなき真理を受けてゆくのが仏法の味に親しむことです。それは心の底からの満足がえられ、内に豊かに満たさるるものがあります。禪三昧を命とし、ほんとの智慧を養ってゆくのであります。そういう境地にあれば、永く身心を悩ます煩惱から離れ、常に真実の楽しみ、仏法のよろこび、内からあふれ出てくる楽しみを受けます。これは極楽に生れた聖者の話で、私共凡人の関係のないことと思つてはなりません。

今ここに称うる一声一声の念仏の中に弥陀如来本願のお力を全身にいただいております。如来本願のお力を全身にいただいております。その中味は仏法の味に親しみ、禪三昧を食とするものであります。まちがいだらけ、あやまちだらけの私の上にもかかる境地を頂けるのは、実に如来よりの御はたらきであります。今の一声の南無阿弥陀仏の内実であります。形ある食（段食）を頂いて更にこうした精神的な食を頂いてこそ、形ある食を頂くありがたさも現れるのであります。



お十夜の話

関東の三大十夜など

阿川文正

十月から十一月にかけて各地の浄土宗の寺院ではお十夜の法要が厳修されている。この十夜法要と云うのは元来、十日十夜修せられる所の法要の意味であって、これを一般に「お十夜」と呼ばれているのである。十日十夜の典拠は「無量寿經」巻下に、

此に於て善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国中に於て善を為すこと千才なるに勝る。

と説かれているのに依る。つまり現世に於いて一日一夜の善事を行うと無量寿国（極楽浄土）で行う百年の善事に勝る。善事を行えば一粒万倍の功德があると云うのである。又

「阿弥陀鼓音声王陀羅尼經」には、

若し彼の仏の名号を受持するものあり、其の心を堅固にして憶念して忘れず、十日十夜、散乱を除捨し、精勤して念仏三昧を修習し、彼の如来の常恆に安樂世界に住す

ることを知り、憶念相続して断絶せしむることなく、此の鼓音声王大陀羅尼を受持し誦誦し、十日十夜六時に念を專にし、五体を地に投じて彼の仏を礼敬し、堅固正念にして悉く散乱を除き、若し能く心をして念々に絶えざらしめば、十日の中に必ず彼の阿弥陀仏を見、並に十方世界の如来及び所住の処を見ることを得ん。

と云って、十日十日一心不乱に念仏を修したならば必ず阿弥陀仏を見奉る事が出来る、と説かれて居り、これ又その依拠とする所である。

つまりこの十夜法要は、一般に陰暦の十月六日から十五日までの十日十夜にわたり、主として浄土宗寺院で行われる別時念仏で、屢々引声念仏引声阿弥陀經の唱和を特徴としているのである。我が国に於いて最初にこの十日十夜の念仏修行が行われたのは、室町時代のことである。即ち京

都の真如堂に伝わる「真如堂縁起」によると、足利義教執権の時（永享年中・一四二九——四一）平貞国が真如堂に参籠して三日三夜の念仏を修して満願の夜瑞夢を感じ、更に七日七夜の念仏を加修して都合十日十夜の念仏を行ったと述べられている。この貞国の十日十夜の参籠は正に無量寿經の文によるものである。

ついで明応四年（一四九五）四月、鎌倉の光明寺第八世観譽祐崇上人は後土御門天皇より宮中に召されて、三七日の間浄土三部經を講説され、その時天皇は大いに歡感あらせられて光明寺を勅願所とせられた。その年の秋、東山真如堂で古式による引声弥陀經・引声念仏の十夜法要を行い、上人自ら導師となられた。この法要は当時の一般社会の人々の注意を喚起した事は申す迄もなく、これらの講説並びに莊嚴な儀式に対し天皇大いに歡感あり、殊に「引声の弥陀經は希代の勝事なり」との御言葉を賜わり、勅許を得て光明寺恒例の十夜法要になったのである。つまり真如堂縁起は実に十日十夜念仏、即ちいわゆる十夜法要の起源であって、それが光明寺祐崇上人の手によって浄土宗の通規とされたのである。そして光明寺は関東十八檀林中の雄位に列している関係上、全国から此処に集まる修行僧多く、行を終えたこれらの学僧によって、この十夜法要の法

儀が各地に伝習される様になったのである。

この様に十夜法要は真如堂から光明寺へ、そして弘く浄土宗全般へと通達し、宗門独特の法要とされるに至ったのであるが、この法要の意義はたゞ十日十夜の別時念仏であり、また引声の阿弥陀經や念仏を称える法要のみではないと考えられるのである。それはこの法儀が何故十月に嚴修されるのかと云う事からも察知せられるのであるが、先述の祐崇上人は、秋のとり入れのお米や果物、もろ／＼の収穫物に対し、一心に合掌礼拝して感謝の念をあらわされるのが常であった。かたわらの者が上人に米やその他の果物を合掌礼拝する理由を尋ねると、上人は「これらの作物は天地自然界の恵みと、これをつくる百姓の人々の努力とが稔って出来上った尊い収穫である。それを考えると有難くて、どうしても感謝の合掌をせずにはいられない」と答えられたと云われている。上人は秋になると、何時も自然の恵みに深い感謝の念を新たにされ、同時に総てのものを生み出すものに対して、感謝する行事をもちたいものと考えていられたのではなからうか。つまり十日十夜の別時念仏を修して仏恩報謝の為に財物を仏前に供えるならば、一年中どの時期に行われてもよいのであるが、祐崇上人が明応四年に宮中奏修した十夜法要が十月であった事は、上人が

常に秋の收穫物に感謝していられたこと、即ち天地自然への感謝の念の表われであると考えられるのである。現在に於いても殆んど浄土宗寺院では、十夜法要に際して先祖の霊を供養すると共に、秋の初穂米を仏前に供えて仏恩報謝し、合せて先祖に豊作の喜びを報告しているのである。

然し乍らこの十夜法要は、各地方により又各寺によって特長を有し、その行事内容も自づと異にしている様である。即ち鎌倉の光明寺では毎年十夜に備えて信者達が双盤念仏の練習をし、引声阿弥陀經を誦すると共に独特の双盤による念仏が修せられ、壯觀この上なき有様を催すものである。それ故にこの十夜を俗に「双盤十夜」と呼ばれている。この双盤十夜は独り光明寺のみでなく、これを中心とする神奈川県一円に行われ、秋のとり入れがすむと村人達はこの双盤念仏の練習を開始し、各寺毎に特有の諷誦文を讀み、又十夜の当日には本堂前庭に角塔婆を建て、「善の綱」をかけ、参詣者に結縁させているのである。又埼玉県鴻巣の勝願寺では、檀信徒のみならず遠隔の地からも群衆が参詣し、先祖の供養に沢山の塔婆（関東では六尺塔婆を使用する）をあげる所から、俗に「塔婆十夜」と云われて居り、八王子の大善寺の「諷誦文十夜」と共に、これら三寺の十夜法要は関東の三大十夜と呼ばれ、いづれも門前は

云うに及ばず境内までも市が立ち並び、サーカス・見世物等の小屋掛けまであって賑いを呈している。

その外九州の某寺に於いては、十夜の諷誦に平諷誦と永諷誦とがあり、平諷誦は一般に修せられている所謂その家々の先亡者を供養するのであるが、永諷誦は若死とか戦死者、又はその土地の功労者など、人々に惜しまれている故人に対し、幾人もが施主となって供養し回向するのであるこの諷誦は都会の寺院には少なく、地方に於いて所々に見られる様である。

又八王子大善寺の「十夜勸進記」によると、三河の大樹寺の十夜は、応仁元年（一四六七）松平親忠が伊野田の戦に愚底上人より信心を授かつて奇勝を得たが、のち文明七年（一四七五）愚底上人の教えに従って戦没亡魂の離苦得楽の為七日七夜の念仏を修して、これが永代化したものだと伝えている。これらは十夜と亡魂供養とが密接な関係にある事を物語るものである。

以上の如く各地方によって十夜法要には色々な形式で厳修され、また各々それ相当の意義をもっているが、現今に於いては十月六日より十五日まで十日十夜修すべきであった十夜法要は、それが三日三夜となり成満の日を十五日に当て、いる様であるが、都会寺院に於いては一日一夜と化し

て、日程も各寺の都合によって任意に定められている様である。これはやはり現今の多事多忙に究せる生活の為、十

無数の機縁

おなじく道を修めても、先に悟るものもあれば、後に悟るものもある。故に他人の道を得たのを見て自分のまだ得ないことを悲しむに及ばない。

弓を学ぶにも、最初に当るところが少なくても、練習すれば遂に当るようになる。水の流れは流れ流れて最後に海に入るように、道を修めて止めることがなければ、必ず悟りを得られる。眼を開けば、何処にも教えがあるから、機縁もまたどこにもある。

香をたいて香気の流れた時にその香気が有るのでなく、ないのでなく、去るのでなく、来るのでないという相を知って、それを機縁に悟った人もある。

道を歩いて足に刺をたて、疼

きの中から、疼きを感じる心を考え、もと／＼定った心があるのではなく縁にふれていろいろの心となるのであって、一つ心も乱せば醜い煩惱となるし、収めれば美しい悟りとなることを知って、悟りに入った人もある。

欲の多い性質の人が、自分の欲の心を考えながら、欲という薪がいつかは智慧という火になるものであると知って、しまいに悟りに入った人もある。

「心を平らにせよ、心が平らになれば、世界の大地もことごとく平らになる」という教えを聞いてこの世の差別は心の見方によるものであると考えて、悟りに入った人もある。まことに悟りの縁には限りがなく、無数である。

日十夜を修する事は参詣者に対して精神的にも物質的にも大きな負担をかけるものであり、その便宜の為にも今日では一日一夜とちゞめられたものであらう。然しその嚴修される意味合いに於いては何ら変わる所はない。

浄土宗に於いては、阿弥陀仏の本願を信奉し念仏を称えてそれを相続する事を以って最も大切とする。この十夜法要に於いて引声念仏を称えていると云う事も、そう云った目的を含んでいるのである。念仏行は「行住坐臥の念仏」と云って、何時・どこでも・誰でもが、たやすく称えられる念仏であって、それが念仏道の高く評価される所以なのでもあるが、この様な易勝念仏でありながらも、現今のやうにめまぐるしく移り変わる時代にあって、多忙な日常に追われている我々凡人にとっては、その行住坐臥を問わない念仏すら、恥づかしい事乍らなか／＼十分に修せられないうのが現実である。それ故、何かの機会を設けて、少しでも念仏に親しみ、念仏を称へる事に心がけたいものである。その意味でこの十夜法要も一種の別時の念仏の機会と解して参詣され、大いにお念仏を称えられる事をおすゝめしたい。そして先祖の御供養は勿論のこと、天地自然の恵みと仏恩に感謝すると共に、一粒万倍の大利益を自然のうちに得られて、明るく・正しく仲よく日々の生活を送りたい。

いたずら

ふんとえ にはしすすむ



いけのきしに くろいねこが とんできま
した。くろいねこは、きんぎょが およいで
いるのを みました。

くろいねこは じぶんも みずのなかに
はいりたいのですが、およくことが できま
せん。いつまでも いつまでも きんぎょの

およいでいるのを みていましたが、うら
やましくなって とうとう おこりだしまし
た。それでも やさしいこえをだして、
「きんぎょさん、こちらのきしに いらっ
しゃい、おもしろいものがあるよ」

とよびました。きんぎょは、なんだろう な
にがあるのだろうと、くろいねこのいる き
しのほうに およいできました。すると く

ろいねこは ぱっと てをだして、きんぎょ
をつかまえようと しました。みずが び
しゃっと とびました。きんぎょは びっく

なつも、おわりになると、おひさまの ひ
かりが だんだん よわくなってきます。で
も ひるまの おもては、やっばり あつい
のです。

にわの いけの きんぎょは、みずの ま
んまるい わをかい およいでいます。い
っぴき、にひき、さんびきとならんで たの
しそうです。

て うそを いったり、きんぎょを つか
まえようと したりしては」

☆

じぶんの あそびで

ほかのものを

いじめては いけません

そんな いたずらしていると

いたずらっこに なりますよ

いたずらっこは

こんどは

じぶんが いじめられる

いきものは

みんな おともだち

なかよく しましょ

みんな にこにこ なかよしね

☆

しろいいぬに いわれると くろいねこは
「そうだ わたしが わるかった。およげ
ないので はらがたつて いたずらをして
しまった。ごめんね きんぎょさん」
といって、きんぎょに あやまりました。し

ろいいぬも いいました、

「きんぎょさん。くろいねこさんを ゆる
してね」

きんぎょは

「いたずらしないなら いいのよ。しろい
いぬさん、くろいねこさん、なかよくしま
しょうね」

といって およいできました。

禍福は姉妹

ある日、欲ふか爺さんの家に、美しく着飾
った娘さんが訪ねてきました。お爺さんが
「何かご用ですか」というと、その娘は「私
は富を与える福の神です」と答えました。お
爺さんは大へんに喜び、美しい娘さんを大切
に家に請じ入れて、大いそぎでご馳走をつく
り、あれやこれやと手厚くもてなしました。

するとすぐ後から、今度は卑しいみなりを
した娘さんがきて、お爺さんが何んにもいわ
ないのに、どんどん家の中にあがってしまし
た。お爺さんは驚いて「あなたは誰ですか、
どうして黙って家の中に入ったのですか」と
いうと、その醜い娘さんは「私は富をなくす

おひさまのひかりが、みずのうえに いっ
ぱいに ひかって きらきらしていました。
しろいいぬのかげも くろいいぬのかげも
みずに ゆれていました。

（この中の詩は、法句経にあります。ある時
お釈迦さまは児童たちが杖で蛇を殺している
のをみて、「すべては幸福をこのむ」と説か
れたものです）

貧乏の神です」と答えました。お爺さんは
ますます怒って「さっさと出て行って下さ
い」といいました。するとその娘は「私を
追い出すことは愚かなことです。さっき家
の中に入った福の神は私の姉さんですが、
私たちはいつも離れたことがありません」
といいました。お爺さんはそれでも醜い娘
さんを追い出しました。するとそれと一緒
にさっきの美しい娘もいつか消え去って姿
がありませんでした。

生があれば死があり、福があれば禍があ
り善いことがあれば悪いことがあります。
愚かなお爺さんは、禍だけを追い払って福
だけを求めようとしてしまいましたが、やはり福は
得られませんでした。賢い人はこれらの二
つともものりこえて執着いたしません。



真心を出し合う――

赤い羽根の運動

鵜飼 俊成

一、序

毎年十月になると「赤い羽根の運動」が明るい美しい季節行事として全国一斉に開始されるが、ことしはこの運動が始められてから丁度十五周年になる。

二、戦前のうごき

赤い羽根の運動は一九一三年（大正二年）に米国オハイオ州クリーヴランド市に起った慈善博愛連盟の運動が始めでであるとされて居る。日本では大正十年に長崎県社会事業協会が長崎市で十月二十日から二週間にわたって行ったのが始めであるが一回だけで続かなかった。

東京では昭和初頭の経済界の不況が民間社会事業にもたらした局面を開くするために東京府社会事業協会が主となって昭和三年七月

から四年六月にわたり府下の民間社会事業の実状を調査したり、米国の赤い羽根の運動を研究したりして東京社会事業募金連盟の組織案や募金計画の大要などを決定したが実施に至らずして終った。

三、赤い羽根運動の発足

赤い羽根の運動が全国的に行われるようになったのは終戦後の昭和二十二年からである。当時は戦前六千七百程あった民間社会事業施設が三千程に減少して居た。戦禍で幾層倍にふえた対象者に対処するために最大の機能を發揮しなければならぬにもかかわらず、残存する施設も大半は致命的損害を蒙って居りほとんどその機能を喪失して居たのであった。そこで民間社会事業の振興の必要が痛切に叫ばれ、一面には公私分離の原則にもとづ

き民間社会事業の自主性を確立するために、他面には当時のさし迫った局面を切り抜けるために国民たすけあい共同募金運動即ち赤い羽根の運動が全国的に展開されるようになったのである。赤い羽根は第一年目は金属性のバッチであったが第二年目から赤い羽根を用いるようになった。又募金は戸別募金、街頭募金、法人募金、学校募金、職域募金、興行募金など各地思い思いの方法で毎年十月一日から全国一斉に展開されるのである。

又郵政省の協力により昭和二十二、三年の両年は寄附金つき記念切手が発行され、二十四年からは世界に類例のないお年玉年賀はがきが発行され、それに附加される寄附金が社会福祉のために大きなはたらきをなして居り又NHKたすけあい運動も社会福祉に大きな効果をあげて居る。

四、社会福祉事業の民主化

赤い羽根の運動が始ってから毎年私は町会の一員としては応分の寄附者になり、民生委員としては寄附金を集める協力委員となり、施設の経営者としては配分金をいただいで居るが、私は民間社会事業関係者として赤い羽

七ふしぎ放談

根の運動に対して感謝に堪えないことは赤い羽根の運動で民間社会福祉事業が全国民の支持の上に行われて居るということである。前に東京府は昭和初頭の経済界の不況が民間事業にもたらした局面を開くために共同募金の調査研究をしたことを述べたが、その調査の対象の一つに私の施設があった。

当時私の経営して居た同善会は渡辺銀行の頭取渡辺治右衛門氏が後援者であった。渡辺氏は同善会の経費の不足額を毎年寄附されて居られたが、昭和三年時の片岡蔵相が議会の委員会で手形の交換尻の合わない一例として渡辺銀行を発表したのがきっかけとなり各銀行の取付騒が起り終に渡辺銀行は閉鎖の止むなきに至った。

その結果渡辺氏は同善会に対する援助を打ち切るの止むなきに至ったのである。このため同善会の経営は困難におちいったのであるが、このことは民間社会事業が一特志家の援助だけに頼ることなく国民全体の援助の上になつて必要が叫ばれるゆえんであり、従って共同募金の必要を痛切に感じたゆえんであったが、当時の関係者は金を集めることより配分

がむつかしいと云うようなこともあって実施に至らず終つたのである。

又私の関係する施設に八幡学園がある。世間では山下清画伯と云えばよく知つて居られるが、放浪の画家山下清を出した八幡学園の創立者の苦心は知られて居ない。八幡学園の創立者故久保寺保久先生は京都大学の出身で、先生は戦前同善会内に早稲田大学教授戸川行男先生と毎週土曜日の午後異常児童相談所を開設し精神薄弱者のテスト並に相談に応じて居られた。然し保護者から相談を受けても精神薄弱児を收容する施設がない。そこで久保寺先生は私財を投じて市川市の八幡神社の近くに八幡学園を創立したのである。学園は其後現在地に移転した。然し創立当時は児童福祉法も精神薄弱者福祉法も勿論ないので一時は非常に経営も困難で、ある時は電灯料の滞納で電灯を消されたことすらあった。戦後は社会事業の法律制度も出来又共同募金の助で経営も安定し先年赤い羽根の運動期間中に天皇皇后両陛下の御視察の光榮に浴したほどである。このように赤い羽根の運動がはじまって民間社会福祉事業は文字どおり全国

一、道德教育反対 青少年の犯罪の増加と凶悪化から全学連の集団暴力行為に至るまで、社会の安寧秩序と相反する事件の多いこと。これは程度の差であるといえれば現在のこれとだけに限らないが、これに輪をかけているのが、学校の先生方の道德教育反対である。先生たちが組合としての実力行使に模範を示し、現在社会の機構を否認し、革命戦士の養成をめざす教育が存在している。同じ国費でやらせるなら日教組や革新大学教授に内閣を組織させてみたいものである。

二、裁判の不信 裁判に対する示威運動が盛んで、児童までが参加している。裁判は裁判長にまかせるものでなく、国民裁判にまかせるというのかも知れないし、大衆の力にもいわけねば無罪にならぬと考えているらしい。大衆だけが人を裁けるといふ人民裁判が革命に先立ってすでに存在している。

三、群衆の警察攻撃 同士が拘引されると警察に押しかけることはいくらもあった。し

民の支持の上に立つようになったわけであり又このことはかつて限られた階層だけに支配されているのにくらべて社会福祉事業の民主化の上に大きな前進で感謝に堪えないところである。

五、心を集める運動

最近敗戦直後の生々しい社会問題が一応私たちの視界から消え去った今日、ともすればお互にたすけあつて立つたあの頃の気持を忘れて赤い羽根に対する情熱がうすれがちになったかの疑念が起りがちであるが、赤い羽根の運動は寄附する人の「心を集める」運動でなければならぬ。大正末年頃であつたと思うが日本海軍の最大軍艦長門がで、私は一日招待を受け長門で東京湾を一周したことがあつた。

丁度その頃救難事業の父と仰がれる東村山の全生病院長光田健輔先生が救難事業についての話を伺つたのであるが、先生は私が軍艦長門のことを話した訳ではないが偶然にも

「軍艦長門一隻分の建造費があれば日本中の瀬は撲滅が出来る」と話された。私はこの話を聞いた時若し光田先生が民間社会事業であ

ればこのような人のやらない尊い仕事に従事されて居る方に資金の心配までさせるべきでない。資金は全国民で集めて上げるべきだと思つた。

赤い羽根の運動は私が光田先生の話聞いて思つたようにさう云う金なら喜んで出そうと云うことにならなければならぬのであるが、現在赤い羽根の対象はゆりかごから墓場までと言はれて居る通り種々の社会福祉施設があり而も自分でどの事業にと指定して寄附するのでないから喜んで金を出して貰うことはややもすれば無理かも知れないが、赤い羽根の運動はただ金を集めさえすればよいと云う訳でない。又わけもわからずに寄附していただくのではなく理解と納得の上でそういう金なら喜んで出そうという「心を集める」のでなければ健全な共同募金とはいえない。共同募金は国民全体が社会福祉を理解し社会福祉を自分自身の問題と考えるようになることに重要な意義があるのである。

六、まごころを出し合う運動

赤い羽根の運動の金は冷たい法律や規則にしばられてだす金でなく、人々の温い自由意

かし昨年の山谷事件、今年の釜ヶ崎事件は明かに警察攻撃であり、局部的な内乱である。警察はあてにならぬとあつて自警団が組織された。昔の米騒動、焼打ち事件は話に聞いていたが、今では騒擾罪にならない騒擾が横行している。氣に入らなければ警察もいらぬらしい。「弱きもの、汝の名は警官」か。

四、オリンピック開催 かつてナチスドイツは自国の隆盛をみせるためにオリンピックに熱をあげた。わが国の場合は道ができない競技場もいつできるか解らない。お祭り騒ぎの招致ができたなら急に嫌氣がさしてしまつた。国際的祭典を催すのにふさわしいかどうか。競技の勝敗は問題でないが、敗けること確実と解っているのも乗り氣がしない。いつそ米軍施設がなかったらあるいはオリンピックを招致しなかったかも知れなかった。

五、自動車の洪水 急ぎの用事で自動車に乗つたら交叉点で二十分待たされた。交通状態の放送を聞いていると交叉点での麻痺ぶりが目で見えるよう。今日は早く着いたと驚くことのあるのが自動車利用者である。そのくせ停止線に列んだ自動車は一秒の何分の一か

慈悲と喜捨

ここに道を求めるものの修めねばならない慈悲と喜と捨の四つの大きな心がある。慈悲を修めると貪りの心を断ち、悲を修めると怒りの心を断ち、喜は苦しみを断ち、捨は恩と怨のいつれの入に対しても、差別を見ないようになる。

多くの人々のために、幸と楽しみにならないものを無くすることは、大きな慈悲である。多くの入々に幸と楽しみを与えることが大きな悲である。そして多くの入々に歡喜の心を以て向うのが大きな喜である。またすべてのものに対して平等に隔てをしないのが大きな捨である。

かくて、この慈悲、喜、捨の四つの大きな心を育てて、貪りと怒りと苦しみと愛憎の心を除くのであるが、悪心の去りがたうことは家を守る犬のよう、善心の失いやすいことは林を走る鹿のよう、また前者は石に画く文字のように消えにくく、後者は水に画く文字のように消えやすい。それゆえに、道を修めることは、まことに困難なものである。

志によって出される金である。この意味から只貧しい人に金や物を寄附するというだけでなく「温いまごころを出し合う」のでなければ本当の意味での赤い羽根の運動ではない。

このまごころを出し合うと云うことは仏教精神から言えば慈悲の精神である。仏教では生活の原動力を慈悲におかねばならないと主張する。慈悲を生活の原動力とすると云うことは自分の生存することによって世の中が少しでもよくなるように、自分の生存することによって世の中の悪が少しでも減少するように念願することである。赤い羽根の運動で只貧しい人に金や物を寄附すると云う考はこの慈悲の精神によって貧しい人に金や物を供えたと云う尊い精神にかわってくる。この貧しい人に物や金を供えたと云う精神こそ仏心であつて赤い羽根の運動の眞の精神でなければならぬ。

最後に配分をいただく者として皆様に心から感謝申上げると共に、赤い羽根の運動の続く限り永遠に輝く人類愛の情熱が奮勃として流れるであろうことを祈念して止まないものである。(東京私立保育園長会長、同善会保育園長)

を争つて走り出しているし、最大限法規を無視する。信号機を全部消して、交通巡査にストライキをしてもらったら、消えるべき車と人が消えてくれるかも知れぬ。

六、国鉄新幹線の工事 国鉄新幹線の工事は着々進んでいる。ただし所々においてでき上った線路の上には列車を置いて指定旅館を開業するのも知れない。中でもトンネル工事が一番進捗している。これは貯蔵庫として有望である。少なくともこの上に列車が走るまで線路に油を塗っておくことが必要である。

七、東京駅の改善 東京駅ばかりでないが駅は立派になった。ただしお客のことは別である。盛装をした人たちが、床に新聞紙を拡げて何時間も座り込んでいる。直接腰を下しては身体に悪いと椅子を貸す商売が繁盛している。知らぬ人がみたら被難民収容所そっくりである。もっともこれだけ多数の人が座らぬならば、東京駅の広間はいらない。時間がきて二列縦隊で歩いてゆく人々の何んとおとなしいことか。運賃を値上したのに、それでもまだ乗るお客の方が悪いに違いない。



近代高僧伝

白旗 辨智

大橋 俊雄

か、さもなくば帰国せんと思いなやんだ末、志を決し兄広井恭隨が住していた折立超勝寺を訪ねることになった。

居ること一年、明治三年には岐阜の本誓寺に董じ、専ら寺門の維持につとめたが、同二十年五月知恩院の財政極度に急を告ぐるや、時の門主日野靈瑞は如何にして財政の立てなおしをしたらよいかと腐心し、大師前の供養すら事欠くというに至っては唯涙するばかりである。山門に競売の張紙がされたことを目にしては全く面目がないと大師前に涙してわびたという。

時に門主の召に応じ、

「われ祖山の捨石とならん、祖山をして昔日の姿にかえしむるため、粉骨捨身どのような困難がおしよせてきても必ずやこれを完遂したい」

という悲愴な決心を胸にいだき、山田辨承と共に二十二年九月から三十年まで九ヶ年の長きにわたり、門主をたすけ財政の整理につとめた。門主ともども草鞋ばきで全国あまねく掛錫し寄附の勧募に全力をそそぎ、九年在山の間によく祖山知恩院をして貧窮のどん底

濃尾の平野が美濃の山々に接するあたり稲葉郡江口村に辨智が呱呱の声をあげたのは天保十年三月三日のこと、父は稲葉佐右衛門といい、彼はその七男として生れた。次三男は何れ家を出なければならぬ。しかし信仰の念のあつい両親の願いは我子のうち一人でもよいから出家させたいということであった。

その両親の期待は恭隨・辨智二人の仏門に入ったことで報いられた。兄恭隨は折立超勝寺に、辨智は京都にのほり泉谷西寿寺の恵力堪忍の門を叩いた。

堪忍といえは名古屋の素封家岡谷氏の出で懸頓について戒律をうけ、以来持律し、日夜

講席をはると共に、時に華頂門主尊超法親王もおしのびで法門をお尋ねになられたという当代に名だたる学僧の一人で、彼のまわりには常に多くの学僧たちが教を請うていたという。辨智もその一人であった。

彼が出家したのは嘉永二年十一歳の時であり、長じて江戸に遊学、増上寺の教真寮でひたすら勉学にいそしんだが、時偶々明治維新の波は増上寺一山をおそい、縁山三百余年の間にきづきあげられた森厳な学制も弛緩し、三千の学徒は望みをたって四方に離散するという有様で、辨智もひと知れず進退については熟慮し、ここに独り留まり勉学にいそしむ

から漸く旧觀に復するにまで至らしめた彼の功績は極めて大なるものがあつた。その間自坊本誓寺は二十四年十月二十八日の濃尾の大震災にあい本堂庫裡は傾き、まさに倒れんとする一步手前。且つ中門と表門は類焼し、土藏は見るかげもなく失せてしまった。にもかかわらず、この惨状を目にし耳にした辨智はゆっくり腰をおしつけて復興につとめるとい

う余裕すらなく、直ちに上山して祖山に在住し、寺はすべて兄恭隨の弟子北方西運寺の賢譽隨定に任せきりであつた。彼の最も信賴する隨定がおつたればこそ、寺務を顧慮することもなく、祖山の復興に献身することができたのであり、災後隨定は本堂庫裡土藏を修葺し、表門を再建した。住職不在中このような大事業をなしとげ、しかも辨智をして安心して祖山のためつくすよう心がけた隨定の心念は大いに多としなければならぬ。

三十年職を辞するや、門主野上運海は特に絆衣を賜つてその功にむくいたが、それにもまして彼が辨承と共に草鞋ばきで祖山復興の熱意にもえ全国留錫した七十九歳の門主日野靈瑞大僧正を二十九年五月失い、又三十年に

入り六月三十日隨定をなくしたことは会者定離のならいとは申せ、如何ばかり悲嘆の涙にくれたことであらうか。三十二年十月には財政問題克服の功が一般に認められ、越前西福寺の末山信徒により「どうか来住してほしい」という懇望もだしがたく移住したとはいふものの、疲労が重なつた故であらうか肺をわづらう身となつた。

彼には是証・靈光・辨竜・辨真というような十数名の弟子たちがおつたが、弟子たちには誰彼の差別なくお菓子でもあつたと必らず弟子達を全部方丈に呼んで、「さあお菓をあげる、菓の調合はすべて平等にせにやならぬ、さあ一ぶくづつ」と言つては同じように分け、お小遣をやる時は何か一つはめてやるのが例になつてゐた。決して欠点をあらいだてることがなく、弟子たちの行動を目にし耳にしては何か良いことはないかと常に心をくばつておられた。若し誤つた行いでもすれば、静かにその不正をただし顔をかえたり声を荒らだてることは一度としてなかつたという。蕃は非常に好きだつたやうで、閑さえあれば、そして相手さえいれば朝から晩まで碁盤

に向つてゐたこともあつたらしい。

しかしそのように好きな蕃も知恩院在住の頃はあまりなされず、越前に移り閑を得るようになったてからは可成り熱心にやつておられたやうであり、又夏の夕べ湯からあがり薄着のまま柱にもたれ、月琴を弾いて一人たのしんでゐたこともあつた。

晩年の彼は曾つて祖山の復興に示めされた熱意も、病の故に十分果たすこともなく、「折角ここに迎えられたのになすところなく、無意にすこすのは誠に口惜しい」と常々申されただ花鳥風月を友とし、又京都その他の地に転地して静養し、心静かに念仏のうちに生活してゐた。

「お前さんは色白のやさしいやさしい人でした」と語る末弟中村善苗尼の語る言葉のうちに彼の性格の一端を知ることがで出来よう。そして自から病のあらたまつたことを知つた辨智は本誓寺に帰り、三十七年九月十日ねむるがごとく忽然として円寂された。

時に年六十六、門主は往年の功を嘉し權僧正を追贈された。法名を広蓮社導譽上人天阿空外辨智大和尚という。



実 話

環境に順応した

お腹の収縮

ラーゲルの
思 い 出 第三話

吉 野 翠 幹

井戸水につけた僅か一本のビールに過ぎないが、晩酌をやりながら、子供たちの健たなぶりを眺めている時が、私にとって最も幸福な時である。内地帰還後に生れた腕白たちがすっかり平らげた空の茶碗を自慢そうに見せる様子も嬉しそうである。親なら誰も経験した終戦後の食糧不足、そのため味わされたいろいろの苦心談は、今でも話のたねになっている。私が内地に帰ってから身につまされるこれらの話を聞いて、私たちはラーゲルで苦心をしたが、私たちばかりの苦勞でなかったことを知った。ただ違うところは、買出しや物々交換をしたくも出来なかったという点である。

さて終戦は、朝鮮鎮南鋪の北方約二十軒の温泉里飛行場に近い山頂で知った。食物は約

半年分を貯えていたので、終戦と同時に朝鮮人の反乱を予想して籠城の準備こそ行つたが食糧については全く困らなかった。そればかりでなく飛行場には航空食と称する特別食が豊富にあったので、自由にいくらでも食べられた。

しかし平壤を通り東海岸の興南にゆき、自分たちで鉄条網をはった収容所に入ってから極端に食糧事情が悪化した。食糧はもちろんソ連の給与であるが、これが何ものなのか誰にも解らない粉で、煮ると糊状となったが、とにかくそれを食していたのである。

当然のことに間もなく全員栄養失調に悩まされた。夕刻になると何うしたわけか、物に躓いて転んだ。その数が次第に増して、これが夜盲症であると解るには日数を要しなかつ

た。それと同時に下痢が流行った。もとより悪質の下痢でないから心配もしなかったが、全員が下痢した原因はやはり主食の材料にあつたらしい。こうした状態が更に進んで敗血症となった。初めは胸や背中に赤い斑点ができて、その内に菌莖を指で押すと、血がにじむようになった。

軍医がいても薬品がなくてはどうにもならない。軍医は何こからか鍼を見つけてきて、専ら鍼治療を行った。腹痛等は鍼で奇妙になおつたが、その他の病氣には効くのかどうかははっきりした結果がでなかった。

それにしても何んとか下痢をとめない、ますます栄養失調となる。そこで下痢止めの炭を作ることにした。まず薬を二糧位に細かく切つて、空缶に入れる。この缶を泥で密封

して焚火の中に放り込んで十分に焼く。すると薬が炭化して立派な薬ができた。食後に必ず服用させたところ、仲々よく効いて下痢患が目に見えて減少した。仕舞いには製薬が間に合わなくて、空缶を探し出すことに苦勞したものである。

次にはビタミン剤を工面しなくてはならなかった。兵士が千名いるので、出来ないことは何もない。ある兵士がやっと新薬を発明した。材料は松葉であるが、松葉を粉末にするところに苦心があった。松葉粉末の秘法について、その兵士に質ねても、どうしても伝授しなかった。聞くと



ころによれば、彼は内地に帰って特許をとることとであった。しかし折角の新薬も評判が悪かった。つまり松脂臭くてのみ難く、肝心な病気に効きそうもないというので自然と消えてなくなった。

新薬が悪評のうちになくなったというより、もっとすばらしいものが手に入ったので

実はいらなくなったのである。それは大豆であった。大豆が手に入ったので、そのまま食べるのをやめて、萌を作った。この萌作りは実に大成功で、やがて夜盲症も敗血症も治ってしまった。私は今もなお、ビタミン剤には大豆の萌が最優秀であると信じているが、それはこの時の体験によってである。病人が減って気をよくし、今度は大豆で納豆を作った。これまた大評判で私が最も美味しいものは納豆と信じている原因がここにあった。

更に事情は好転して、八百屋から直接野菜が買えることになった。ある時、八百屋が白菜を持ってきたというので、思い切り多く、つまり全部買上げてしまった。やはりその頃偶然にアルコールが手に入った。ただし薬局で売るそれではなく、実は運転手が自動車のタンクから飯盒一杯盗み出して、私たちにくれたのであった。運転手はそれを飲む方法も詳しく教えてくれた。まずその飯盒に火をつける。猛烈な炎をあげて燃えるのは当然だが、初めの内は赤い炎で、これはガソリンの部分

が燃えている証拠である。やがて炎は無色のものに変ってくる。こうなればガソリンがなくな

ってアルコールが燃え始めたことを示している。ここで飯盒に蓋をする。アルコール分を何度とするかは勝手に、好みに応じて水を割ればよい。しかし一口飲んでみて驚いた。ガソリンの臭気が強くて、鼻をつまむ位ではどうにも飲める代物でない。かといって捨てるのは勿体ない。下腹に力を入れて、息を止めながら、一口二口耐え難い我慢をしながら飲んでみた。アルコールは第一に臭覚を麻痺するらしく、その内にさしもの悪臭も気にならなくなった。幾月ぶりかであげる怪気炎は、天をもつくばかりであった。酒？の肴には、買入れたばかりの白菜があった。めいめいが一株の白菜をかかえて、これを嚙りながら飲むのであった。宴酣となれば手足が躍動するのが自然の理である。一人が白菜をかかえ込んで起ち上ると、われもわれもと白菜を抱く人々で輪をつくった。

感極まれば乱舞するとは、何も土人に限ったことでない。この酒が、実はさっきまで自動車のタンクにあったからか、腹に入って猛然たる馬力を出してきた。わけもなく手を振り足をあげて、何やらわめきたてながら、抱

いた白菜を時には嚙り、時には頬をすりつけ、乱舞する姿は狂乱というより、この世のものとは思えなかった。

そして翌朝、フト気がついて恐る恐る目を開けたとき、壁が見え、自分の手が眺められたので、ホッと安心したが、このときの嬉しさは忘れられない。

その内にわれわれは労務に従事することになった。仕事は船の

荷役で、船がつけば昼夜の別なく何んでも積み込んだ。何んでもというのは、ある時は鉄材を、ある時は穀物を、と雑



多のものであった。中でも白米を積み込んだ時のことは印象的であった。船は五千トンから七千トン位のもので、鉄道と自動車を動員して白米を港に運んできた。やがて船倉に白米が満載され、出港する船はいかにも重そうに見えた。これを見ていた朝鮮人が、その内に飢饉になると心配していたのも、実感としては無理のない嘆きであった。

兵士たちは荷役が白米であると解ると皆喜んだ。八時間の労務を終えて帰るときは、ズボンの両足にこっそりと白米をつめ込んで持って帰れるからである。ソ連兵自身がこの白米を朝鮮人に売って小遣金をもうけていたので、兵士たちの持ち出しに苦情をつけなかった。また荷役が食糧品でない時は、帰る時ソ連兵が煙草の葉、大豆の俵等をくれた。何れも他国の物であるからソ連兵も気前がよかった。

ある日、興南に兵員輸送用の船が入港した。多くのソ連兵に見送られて、われわれは乗船した。もちろん内地に帰るものと信じていたのだが、船は遠慮なく進路を北にとった。それでも呑気な兵士たちは、ウラジオにいる同僚をのせて内地に帰るのだと喜んでいた。しかし船には満足な給食設備もなく、上甲板に「これから上に昇る者は銃殺する」と記されているのを見て、これはいかんと思った。案の通り船はナホトカに着き下船を命ぜられた。ナホトカからは列車で、野越え山越え、時に砂漠を横断し、とにかく二十四日間の列車の旅を終えて、着いた所がアングレンであった。そこは天山山脈の西方で、バミール高原

の一部に属すとか、仏教に縁の深いタシケントの東南三百軒位の地点であった。

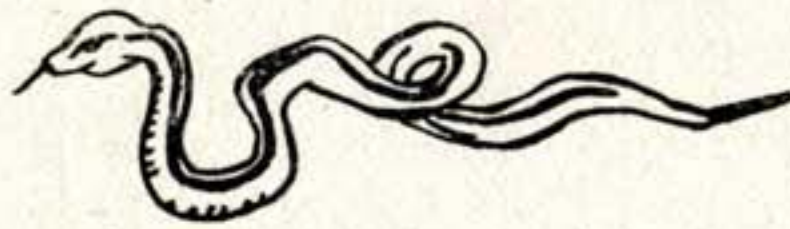
ラーゲルの食事は、ソ連の規定に従って、将校食と一般食に区分され、それぞれについて一人当り肉は何グラム、脂肪は何グラムというように、穀物、パン、砂糖、煙草等のすべてに一定の量が定っていた。ただし問題はその内容であり、質の問題であった。例えば肉(又は魚)は一日何十疋と定っているが、これは骨ぐるみの目方であった。従って肉は肉でもその日によってまるで違うことになる。カ頭が配給になると凄まじい光景を呈する。カッ目を見開いた牛の頭を台にすえ、炊事係が大鈍を大上段に振りかぶり、これを打ちくだく様はまさに鬼気迫るものがあつた。しかし炊事係にいわせれば、頭の配給は結構よいのであつて、結構肉の部分が多いとのことであつた。可ならざるはない炊事係をして長嘆息をさせたのは耳の配給であつた。何十疋に相当する牛の耳は、それだけで炊事場にうず高くなる。この耳の山を見ながら、さすがの炊事係も手がつかぬとか、全部スーブのだしとなつた。何れにしても肉類は各人の皿に分

けられてみると目にとまり難い状態で、この点魚の場合なら、皿の中で発見する程度に形を止めることがあった。

パンは先ごくご承知の黒パンであるが、それならなぜ黒いのか知らない人がある。小麦を製粉しても、ふすまを取去らないから、出来上ったパンはふすまの色と同じであるのが当然で、色が黒くなる。だから粗の一部がパンの中に混っていても止むを得ないことであった。ふすまを取除いた、普通の白パンは特別食で病人か高級官吏に配給された。この階級を白パン族といていた。

一日の労働が終って、ラーゲルに帰ってくると、人員点検があつて解散となる。時間の関係で二組、三組と各作業班が同時にラーゲルの門をくぐることになる。各班とも整列して班長が「解散」と一声命するまで、あだかも運動会で「用意、ドン」の合図を待つ選手たちのように、一同の眼は食堂に向つて凝視されている。そして「解散」の号令がかかるや否や、他の班にまけるものかと夢中で走り出す。もし他班より遅れると、食堂の椅子が空くまで待たねばならぬので、ゴールでのタ

ッチの差が時により二十分も三十分も食事の「お預け」となるから、門から食堂までの約六、七十米を全力あげて突進することになる。百貨店の食堂で多くのご婦人たちが椅子のあくのを待っているのと同じ理くつであるが、その真剣さ、その意気において雲泥の差がある。



運よく第一等に食堂の椅子に腰をかけたとする。やがて当番が食事を配る。パンとスープである。パンの大きさは男の拳位であつて、炊事係が一つ一つ秤にかけてあるので、どれも同じ筈だが、こちらはそう簡単にすますわけにゆかない。炊事係が秤をかけるのに、どうしても過不足ができるから、多いものは角を削り、足りないものはキャラメル一粒位のパンきれを添えるので、同じ量と解つていても削られたのは嫌だし、小粒が添えてある方が好ましいのである。またパンには焼けてかたい部分がある。このかたい箇所は、他の部分より軽いので逆にいえば嵩が大きくなるわけである。それにもまして大

事なことは、そこは齒ごたえのあることである。同じパンでもこうした差異がある以上、ズラリ列んだパンに一瞥をくれる目つきが鋭くなるのも止むを得ない。手を握り肩をいかせて、パンの様子を睨みながら配給を待っている姿をみると、これが無敵皇軍将兵のなれの果てかと嘆かわしい限りであり、子供の前では話したくない図であつた。

石かつぎ、ハツバの穴堀り、いろいろの重労働を終えて、一塊のパンがもらえるのだから余程胃腹にいい聞かせながら食べなければならなかつた。しかしともかくこうなる前にもっと情ない話があつた。

ラーゲル生活に慣れない初めの内は、量の少ない食事には全く困つた。まめな兵士は、スープでも何んでも配給品に水を加えて、つまり量を増してお腹をごまかした。無精な兵士は、食後やたらに水を飲んで、お腹の中でミックスさせた。水だけなら可成り多量に飲んでも支障はなかつたのであろうが、味をよくするために塩を加えたからいけない。食塩水は異常吸収をするから、たちまち水肥りというより浮腫んでしまった。こうなれば

当然腎臓は侵かされるし、心臓が衰弱した。結局は病床につき、甚しきは再起を危ぶまれる位の重態患者まで出した。

また食糧探しに浮身をやつしたこともあった。食糧というのは主として食べられそうなる草のことであるが、この草探しは仲々難しいことであつた。水のない所に草は生えないから、ラーゲルの内には一本の草もない。この曠野の中央を流れるアングレン川近くに行かなくては草が生えていない。しかも行動が自由でないから運よく草のある近くで働いたにしても、休憩時間に草をとるより仕方がない。ずい分かたい草、辛い草、大きな草等を食べた。しかし毒草にやられてから、草探しも止めてしまった。その時の毒草は神経系統を侵したらしく、それを食べた者は、フラフラと曠量がして倒れてしまった。ある作業班の者だけが次々と倒れたので大騒ぎとなり、あの時のあの草が毒草だったという結論になった次第である。

次に食糧探しには蛙と蛇があつた。蛇は主として作業場にゆく途中で捕れたが、蛙は捕れる場所がきまっていた。しかし何んといつても数が少ないので空腹のたしにはならなかつた。われわれの目にとまった蛙と蛇は一匹といえど無事ですまされなかつた。冬眠のため地上から姿を消すまで、彼等の災難が続いた。ただし、これは可成りの成功を収めた。

何故ならこれらは栄養と同時に薬品の代用をつとめたからであつた。脚気によく効いたし特に夜盲症にはてきめんであつた。夕方転ぶ兵士が目に見えて減つて行つた。もしアングレンに鳥や小動物が他にもいたとしたら同じ災難にあつたに相異なるが、彼等にとって幸いなことに鳥も小動物も蛙と蛇の外は蜥蜴位しかいなかった。人間以外の生物としては、時折通りかかる遊牧の羊の群れ、商品を荷つてゆく駱駝たち、または驢馬位のものであつた。また一時、甜菜（砂糖大根）に恵まれたことがあつた。それというのも甜菜の貨車積み作業があつたおかげであつた。この作業班は約六十名で、門前からトラックに乗り込む。トラックは野越え、山越えジャブジャブ河床を渡つて約二時間、凡そ八十軒を走つて作業場につく。トラックから降りると、ラーゲルから持ち出した石炭（木炭のように燃え、炎をあげない）で焚火をつくり、その中に甜菜を放り込んでおく。すると中食までには上手

に焼けて食べられた。この焼大根は食べ放題であるばかりでなく、作業が終つて帰る時、ポケットや両手に持てるだけ持つてトラックに乗ることができた。この程度のことなら監督が黙認するばかりでなく、それとは別に班長には一袋の甜菜を土産に持たせてくれた。この焼大根をラーゲル羊羹と称したが、ほんとに美味しかった。

好事魔多し、甜菜はまことに消化が悪く、大ていの者は猛烈な下痢に見舞われた。下痢をしない程に胃腸の頑強なものでも、甜菜は身体を素通りして原型のまま便所に運ばれた。

アングレンにおける当時の一般ソ連人もまた食糧には困っていた。重労働の男子一人の配給は一日パン一疋であつた。しかも十六才以上になれば、男も女も労働に従事しないとパンの配給がなかった。将校の婦人であろうと配給を受けるために労働をしていた。彼等はよく「働かざる者食うべからず」と私たちに説明していたが、さういう一方で「家にいて裁縫したり、調理をしたり、亭主の帰りを待つてくれる女房が欲しい」とこぼしていた。そんな時は日本の話をして彼等を口惜しがらせたものであつた。中でも食べるさか

りの子供のある所では一層気の毒であった。私の懇意にしていた監督は、いつも朝食なしで、昼食はパン二片に僅かの砂糖をはさんで食べていた。粗食でしかも少量の食量で、よく働けると感服したものであった。たとえ現金があっても、物資がないので、闇取引のありようもなかった。またある監督は一米八十位もある長身であったが、私どもが燕麦の昼食で、ポイポイ口から殻をはき出しながら、その監督に「日本では燕麦は馬糧にしかないが、われわれを馬なみに扱うのか」というと、「われわれも同じだ。ご覧の通りにやせてしまったが、以前はこんな体格をしていた」と、両手を腹の所にやって、ビール肥りの腹のように大きな円を描いてみせた。ところが一般に両手を腹の所にやって大きな腹をしてみせることは「ブルジュア」という意味を示す所作なのであった。偶然この大監督氏が、昔の体格を恋しがる動作をやって、これがブルジュアを恋しがるのと同じ形を示したのは、笑えぬ皮肉にとれて気の毒であった。またこんなことがあった。住宅の近くで働いていて、休憩に地に横転していると、その婦人が私に来いという。私がついてゆくと

部屋に案内して、一片のパンと一本の葱をくれた。さてどうして食べようかと思案していると、その子供が同じようにパンと葱を両手に持って部屋に入ってきた。左手のパンを噛っては右手の葱を噛った。私も真似て食べたが葱の辛さがとても美味しかったし、新鮮な生葱は朝鮮で白菜を食べて以来のことなので、今以て忘れぬ印象として残った。子供が私にも飲めというので、部屋の隅にあるばけつから水を飲んだ。その部屋にばけつ一個の外に何一つなかったことも妙であった。その翌日も同じ時刻に同じ場所に休んでいたが、二度とその婦人は現われなかった。しかし一度でも食べ物をくれた好意は並々ならぬものと感謝した。

ソ連で貨幣価値の切り下げを行った頃にパンを自由販売にするという公約があった。事実パンの自由販売を実行した。すると今までの配給所の前に夜半から行列のできるのも止むを得なかった。どこにもある息け者が後から来て列の前方に出ようとしたので大喧嘩があった。その内にパンは再び配給にもどった。この食糧を悪く利用するのに、ソ連式拷問があった。三度の食事を支給するのに、定刻

より早く窓ぎわに持ってきておく。つまり留置場の中から一時間以上も食事をよく眺めさせておくわけである。そしてこの食事の量を毎日少しづつ減してゆく。ろくな取調べも行われないので、話相手もなく、一人で食事が減量されてゆくの眺めているわけである。この方式はモンテクリスト伯以来のもので、珍しいとはいえまいが深刻な苦痛を味わされるスパイ容疑でこの留置場に入り、ラーゲルに帰ってきた者の話では、最後に部屋を出るのに四つん這いになってしまったといっていた。

さて、夢にまで憶れた内地に帰還した。舞鶴に上陸したとき、足の踏む所を知らないという諺の通り、足が宙に浮いていた。そして第一に目についた貼紙にこう書いてあった。つまり帰還した諸士をもてなすのに、お粥を以てするのは理由のあることで、普通のご飯ではお腹をこわすからである。

それから十数年経った今日に至るまで、私は家中で一番小食である。ラーゲルで訓練したおかげで、適当にお腹が収縮したからである。それでいて殊更にやせることもなし、事足りていることから考えて、胃袋を小さくすることはよい健康法であると信じている。

中国綺譚

妄語のいましめ

牧尾良海

昔、中国の竺山県の部長に鉗耳含光という人があった。彼の妻君の陸氏がかりそめの病気で亡くなってから半年ほど経って、任期も満了になったので、住居を竺山寺の近くに移した。

この竺山寺の裏には大きな岡があった。ある日のこと、ぶらりと出かけて行つてこの岡に登り、あちらこちらと眺めやっていると、忽然とその岡のところに死んだ筈の妻の陸氏が現われた。

含光は、何から話してよいものやら、かつは喜び、かつは歎き悲しんで、死んでからどうすごしているのか、色々と訊ねた。陸氏は、北の方を指さして

「妾は今あそこに居るのです。」

と言つた。指さされた方を見ると、大きな城

廓がそこにあつた。やがて陸氏に伴なわれてその城中へ入ると、荘麗な建物が並び立っていて、人間界の城中と少しも変りがない。その中に一院があり、院内を西へ進むと、数十の部屋が並んでいるのである。陸氏の部屋はその第三番目にあつた。

中へ入ると、陸氏はなつかしげに含光の胸に顔を沈めて来たが、夫婦の情愛は娑婆のときと少しも変りがなく、衣類も調度もありし日と同然であつた。

間もなく、夕闇が迫つて来た。

陸氏は含光から身を離すと、

「ここは大層厳しい規則があるので、貴方はもうお帰りにならなくてははいけませんわ。あさつて、子供たちをつれて来て下さい。頼みたいことがあるのです。しかし、明日は決

していらつしゃってはいけません。」

と言うので、その日は別れて戻つた。

翌日になると、含光は妻恋しさのあまり、又出かけて行つた。

陸氏は、びっくりして言つた。

「今日は、いらつしゃってはいけないうと、あれほど申しましたのに、どうして来たのです？」

咎められてうろろしているそのうちに、緋の服を着た法官や侍従のもの數十人がどやどやとこの院の廊下へやつて来た。陸氏は、慌てて含光を寝台の下へもぐらせ、毛布を下まで垂らして外から見えぬ様にさえぎると、

「見つかるは大変ですから、決して外をのぞいてはいけませんよ。」

と囁やいた。廊下の方から、

「陸四娘！ 出でませい！」

と呼んでいる。陸氏はあたふたと出て行つた。含光は、始めのうちは怖ろしくてじっとひそんでいたが、そのうち幾らか落着きをと戻り戻りして、そつと隙間から外をのぞいて見た。

院内には女ばかり二十八人がいた。緋衣の

法官はこの女たちのまげを解かせて二人ずつ一組みに結び合わせ、釜の中へ投げこんで下から火をつけた。

焦熱に悶え苦しむその叫喚は数里の先まで聞えるほど激しいものであった。

やがて火が消えると役人たちは去って行った。陸氏は釜からはい上ると、走って自分の房へ入って来た。含光は又寝台の下へかくれていたが、手をのばして寝台の上の陸氏の身体を撫でてやると、陸氏は苦痛の余りか、一旦悶絶したが暫らくして正氣に帰った。

平素あんなにも精進に心がけ、誦經念仏に励んでいたのに、どうして更にこんな苦しみを受けねばならぬのかと訊ねると、

「もう先に、妾が病い重くなったとき、お坊さんが見えになって、金光明經を書写するように言われたのです。その時には承知したのですが、病氣が進むにつれ、何や彼やととりまぎれてついつい頼まれたことを忘れて了ったのです。その時の妄語を犯した報いで今こんな罰をうけているのです。子供に会いたいと思うのは、その金光明經を完成してもらおうと考えたからです。でも、今貴方は妾

のこのさまを御覧になったのですから、子供に來てもらう必要もなくなりました。呉々もよろしくお願い致しますよ。」

と答え、泣く泣く別れを告げた。含光は家に帰ると、子供たちに一切の出来事を語って聞かせた。

子供たちは、亡き母の地獄の苦しみを偲んでその夜は皆で泣き明かしたほどであった。翌日、皆で岡へ上って見ると、城廓などは何もなく、ただ一面の雑草の原が荒涼と続いているのみであった。

皆で相談した結果、財産を処分して相当な額のお金をこしらえた。県の長官たちもこの話を聞いてそれぞれ拠出してくれたので、ついに二千貫文ほどの額になった。

そこで長男がそのお金を車につみ、五台山に行つて写經をすることとなった。

五台山にやつて来て、あちらこちらと遍歴したものの、どこに居を構えて写經を始めるか、まだ決められなくて、心落ちつかぬまま又なにがし某の台に上った。山路を辿る途中一人の老僧に出会った。その老僧は

「写經して母君を苦しみから救おうという

のに、何をぐずぐずとろうつき廻っておるのじゃ。その錢をどこかの寺に預け、早速帰つて金剛經を写すがよいぞ。」

と教えると、ふっとかき消えてしまった。長男は、

「今のお方は文殊菩薩さまに違いない。」
と思い、教えられた通り錢を一寺に預けるとすぐさま家へ帰つて写經にとりかかった。

こうして写經が終つたので、或る日、含光は例の岡に上った。今度は城や獄門が見えた。

急いで行つてみると、門はびったりとしまられてゐる。しきりに叩いてゐると、門の中から、問う声が聞えて来た。

「どなた？ 鉗耳懸丞ものではございませんか？」

「そうです。私が鉗耳です。」
と答えると、暫らくたってから一人の婦人が出て来た。

「貴方の奥様から、お礼を言うようにと伝言を託されております。写經して下さったお蔭で、すでに人間界に又生れ替ふことができました。ほんとうに有難うございました。呉々も皆おしあわせにお過し下さるように、と

いうことでした。」

含光はこの伝言を聞いて、深いあわれを覚えた。

「貴女は又どうしてここに居られるのです

か？」

「妾ですか？ 妾もお宅の奥様と罪状がそっくり同じなのです。その為にこうしてここに居るのです。」

夕陽をうけてその婦人の横顔は美しかったが、深い憂いがとことなくひそんでいて、あわれにかなしく見えるのであった。

現在を大切に

過ぎた日のことは悔いず、まだ来ぬ前はあこがれず、取り越し苦勞をせず、現在を大切にふみしめてゆけば、身も心も健かになる。

日がたつにつれて過去のでき事はヴェールにつつまれて、甘い思い出となる。これは自然から恵まれた現象である。すぎ去ったことは多く快いものだけが残し、余程の辛苦をなめたことでも次第にその苦痛がうすらぐ。これはまたいくつかの失敗も、決して失敗のまま残るのでなく、現在への資料ともなり栄養ともなっている。同じ失敗は二度と繰り返さないですむわけである。しかし人によっていつまでも悔いている者がある。これは過去の失敗が現在にかかれていない証候であるばかりか、大切

な現在をも空費していることである。

また将来に憧れる人がある。憧れは希望と似て非なるものであつて、希望は計画と自信により裏づけられるが、憧れは空想によつて描かれた幻にすぎない。従つて憧れることの多い人は、それだけ将来落たんすることの多いことに気がつかない。これの反対が取り越し苦勞である。憧れよりも取り越し苦勞の方が現在にとつてもっと有害である。将来に対し不安を感じることも時によつてはやむを得ないことであるが、それだけ余けいに計画をたて、不安な事に対して突き進む努力が払われなくてはならない。憧れは夢物語りに喜んでいるのであるが、取り越し苦勞は意味のないことに自らを苦しめていることになる。この両者とも将来のことではなく、実は現在にかかる問題であつて、たんに予側のみにふけて現在を無駄にしたならば、それこそますます将来を悪いものとする。

現在を浪費することは現在を放棄していることである。われわれは殺生戒を犯さぬよう心掛けてゐる。生きものの中で、何が大切かといつて自分の命ほど大切なものはない。しかしこの生命は刻々に過ぎてゆく現在の連りに外ならない。不殺生戒の第一歩は自身の生命を尊重することから始まるもので、これは現在の自分を大切にすることである。自分を大切にすることは今日一日の生活を充実させてゆくことである。

過去の失敗や成功の体験と、いくつか持ち得た資料によつて現在が営まれているのである。故に過去に真剣に生き抜いてきてこそ、現在の充実があるのだが、現在の充実なくして将来に期待し得る何ものもない。

このようにすれば卑屈もないと同時に高慢もあり得ない。よく過去を自慢し他を軽んずる人があるが、この人はそこで停止した人であり、進歩のないことに気がつかぬ。

会員だより

◇先般中山義秀氏の放送講演を録音致し、感銘深きまま文字に直して貴会へ送付、早速採用の手続きをされた由喜んでいます。何の力もない私でございますが、幸に静かな山寺にて寺以外の勤務を持たぬため閑暇だけは豊富に恵まれています。仏教大学教授藤吉慈海氏作家横山美智子さん等の放送も録音しました。先生方のご承諾を得られるなら原稿は手許にあります。浄土は創刊以来拝見していましたが皆さまのご苦勞に感謝いたします。(大津市・石畠)

◇貴会いよいよご精勵を加えられ浄土の刊行も順調となりましたことをお喜び申し上げます。同封小切手額面を貴会基金としてお納め下さい。(東京台東・成田)

◇貴会益々ご隆祥お慶び申し上げます。浄土の内容はまことに結構に

て私共大變得る所多大にして参考になり熟読いたしています。何卒先生方折角ご自愛下さるようお祈りします。(埼玉上尾市・和氣)

◇先月本欄の「内容をもっと易しく」を読み面白く拝見しました。しかしこれは全くの見当違いで、御誌の記事は易しく書いたから解るといふものでありますまい。強いて易しく書けば益々解らなくなるだろうと思われます。総じて浄土宗の学者は宗祖の教義を本当は信じていない。一応信じているような顔をしているので、何だかわけの解らないことを書いてしまふ。第三者に一向ハッキリしないのは当然すぎることであります。禅宗系の某誌は内容文章が難しいのに堂々と売っています。何をいわんとするのかさえハッキリしていれば、文章の難しいのは自然に解るし、解ろうと努力する気になります。東京からこんな生氣

のない雑誌が出ていることは現代の奇蹟です。智者学者の多い東京浄土宗は、いい加減に浄土宗を現代に生かす工夫をされたら如何ですか。一度宗祖を抹殺したらどうですか。(東京荒川・某生)

◇宗祖七百五十年御遠忌は知恩院増上寺を初め各寺院で盛大に修行せられ、既成仏教にもこれだけの力があつたのかと、一時は世人を驚かせました。ご同慶のいたりに存じます。私どもの組では、この記念法要を機会に組の檀信徒総代会を結成しようとしてより協議しています。また組の寺々では、何かしら記念事業として後に残るものを行つたし、また計画中のところもあります。省みると今年の御忌を目指して十年も前から準備が行われ、私どもも資金を積立し、また事業費を提出してきました。その当時から盛大な記念法要もよいが、更に後世に向つての事業を

計画すべきだと主張されておりました。育英事業、出版事業、その他いろいろの計画を話として聞いてきました。中でも本宗の合併問題は、この御遠忌までに解決して挙宗一致ばん回を試みるのだと、誰も期待していません。しかるに記念法要は立派でしたが、その他に何が残つたでしょうか、私ども宗侶に對して誇負し得るものをして下さつたでしょうか。宗門は一つの力であり、私どもを指導して下さいるものでなかつたのでしょうか。宗門幹部は本気で努力しているのでしょうか。この点は本派の幹部の方がまだ優っていると存じます。既成宗団が無意気で斜陽族だといわれ、何とか報恩のために微力を尽したいと念じています。だから黙って課金を納めているのです。せめて今後の人材養成に、教育にだけでも努力して下さい。(神奈川・青木)

選 択 集 私 解 (四)



特 急 「ぐくらく」 行

竹 中 信 常

一、仏 様 の 公 約

代議士の選挙演説のきまり文句に、

「不肖私〇〇が、皆様の絶大なる御援助によりまして、当選致しましたあかつきには、必らず……」

というのがあって、いわゆる「公約」なるものを、一席ぶつのである。それをきいてみると、この貧乏で人間ばかりがウジャウジャしている日本国が、たちどころに、スイスのような、静かで、清潔で、天国のように美しい国になるという錯覚におちいってしまう。そこで、大いに共鳴してその代議士に投票して国会に送り出したトタン、公約のこの字もいわずに利権あさりに精を出す。というのがオチである。

仏様をつかまえて、そこらの陣笠代議士にくらべるのは

もつたいたいことだが、仏様もやはり、公約を発表して、仏になったのである。すなわち、仏になるために修行しているものをボサツ（菩薩）というが、このボサツは、自分がさとりを開いて仏になったなら、自分の国を美しく飾り立ててやろうとか、この世の中を改造してやろうとか、衆生をすべて救いにとってやろうとかと、色々に約束する。これを誓願という。観音も、勢至も、普賢も、文殊も、地藏も、すべてボサツと呼ばれるものには、すべてこの誓願が立てられているのである。

ところで、代議士の公約も、人によってその内容がちがうように、ボサツの誓願も色々に立てられる。しかし、その中に、すべてのボサツに通ずる共通のものが四つある。これを四弘誓願というのである。

その第一の誓願は、衆生無辺誓願度「衆生は無数にいるけれども、誓った救わんことを」というのである。観音も文珠も、無数の衆生を救おうと一生懸命なのである。目下誓願中のボサツはそれでよいとして、このような誓願を立てて、すでに仏になつたのはどうなるか。代議士が当選してしまつと、公約を無視するのとは、チトわけがちがう。いやしくも仏様なのだから「衆生をみんな救う」と約束されて、そして、薬師如来になり、大日如来になり、阿しゆく仏になつたのだから、その約束は、必らずはなされたことであらう。

ところが、甚だイカンながら、われわれの歴史の上で、人間が仏になつたのは、釈尊以来一人もない。えらい坊さんも沢山いるが、自分から「われは仏陀なり」と宣言した人は釈尊以外、一人もない。これは一体どうしたわけなのだろう。仏様が公約無視をして、不渡手形を乱発したのだろうか、とんでもないことである。仏様に限って、そんな背徳行為をなさるはずはない。きっと約束を守られ、誓いを果たされたにちがいない。では、現にこの世の中に、ウロウロと無辺の衆生がヨロメイているのは、一体、どうしたわけなのか。

どうも話が理窟に合わなくなつて来た。理窟どおりに行

かぬのは、この世のならいであるが、しかし、そうだからといって、災害地の住民のように、そのままに放り出されて、苦しみ、はいまわっている衆生の身にとっては、理窟どころのさわぎではない。何とか救ってもらいたいものである。代議士なら陳情という手もあるが、相手が仏では、極楽まで行かねばならぬが、その極楽へ行くことが問題なのだから、どうしようもない。約束ははたされたのだ、しかし、衆生は依然として、ウヨウヨとウゴメイている。

この矛盾は一体どうしたことなのだろう。まさか、時効にかかったカワセみたい、または、しまいわすれた宝くじの当り番号みたいに、無効になつて、国庫におさまるといふのでは、あまりにモツタイナイ話である。

二、運賃先ばらい

仏様達は、日本の代議士とはちがつて、チャンと約束を守られて、極楽行きの汽車を仕立てて下さつたのである。ところが、肝心の、これに乗る衆生の方が、モタモタして、いて、のりおくれてしまつたのである。極楽行きの列車は、時間どおりに、仏様一人をのせて、サツサと発車してしまつた。だが駅ホーム、すなわちこの娑婆世界には、のりそこなつた衆生が、ウヨウヨ、ガヤガヤしていようとい

うわけである。

なぜ、のりおくれたのか。どうして、モタモタしていたのか。これには色々と事情がある。

第一に、行く先、即ち極楽浄土についてである。極楽浄土といっても、仏様によってその浄土は方角もちがえば、様子もちがう。アシユク仏と薬師仏の浄土は東方に、宝生如来の浄土は南方にある。また、その様子（内容）も、まちまちである。必らずしも、凡夫が行くに適した浄土ばかりとは限らない。

宗祖は、こういっておられる。

「……もし天台によれば、凡夫浄土に生るることを許すに似たれども、浄土を判ずること浅し。もし法相によれば浄土を判ずること深しといえども、凡夫の往生を許さず。諸宗の所談異なるといえども、すべて凡夫報土に生るることを許さざるが故に……」

どうも、浄土では、衆生は「招かれざる客」のようである。

それよりも、モット大切なことは、汽車の切符が買えないということである。何度もいうように、われわれ衆生は（精神的）な貧乏人なのである。だから、のりさえすれば極楽へ行けるとわかつていても、切符が買えないから、の

るわけにゆかない。何とか苦面しようと、ウロウロしているうちに汽車は出てしまう。

ゴールデン・ウィーク、飛び石連休に、東京の上野駅のホームの雑踏をみているのと、同じように、婆婆世界というホームに立って、無数の衆生がヒシメイているのをみている一人の修行者があつた。法蔵ボサツという人である。ホームからアフレコボレンばかりの人波と、ペラボーに高い切符でしかのれぬ特別仕立の、ガラ空きの「極楽行」の汽車とをみくらべて、法蔵は考えた。なんとかして、貧乏人達に楽にのれるくらいやすい運賃で、極楽行きの列車を仕立てるわけにはゆかぬものか。ヨシ、オレが頑張ってタダでのせてやろう。そう決心すると、法蔵は、沢山の紙キレに何か文句を書いて、衆生の一人一人にくばり始めた。そしていった。

「この紙を持っているものは、タダで、オレの作る西方極楽浄土行の特急列車にのせてやるぞ」

その紙にはこう書いてあった。

「もし、われ仏を得たらんに、十方の衆生至心に信樂（しんぎよう）し、我国に生ぜんと欲し乃至十念せんに、もし生ぜずんば正覺をとらじ」

そして、改札口をとおり時、「南無阿弥陀仏」とひと声

唱えればよろしいと、衆生に教えたのである。法蔵はこうして、無数の衆生に紙キレを配ってやったのである。

「オレは一足先に行っているから、みんなも必らずやっ来ていよ」

そういつて、彼は、早速に、西方極樂に行き、今度はアミダ仏となつて、衆生をのせた列車の到着を、いまやおそしと待ちむかえているのである。

運賃は、法蔵が先ばらいしてくれて、タダなのである。

これなら、どんな貧乏人でも、文なしでものることが出来る。では、法蔵は、なぜ、紙キレに文句を書き、改札口をとおるとき、南無阿弥陀仏となえよといったのか。このことを、選択集では次のように述べている。

「問うていわく、あまねく諸願に約するに、ソ惡を選択して、善妙を選択すること、その理しかるべし。何がゆえぞ第十八願（われ仏を得たらんに……乃至十念せんに生ぜずば……の文）に一切の諸行を選捨し、ただひとえに念仏の一行を選択して、往生の本願とするや。答えていわく、聖意はかりがたし。たやすく解すること能わず。しかりといえども、今こころみに二義をもつて、これを解せば、一には勝劣の義、二には難易の義なり。はじめに勝劣とは、念仏はこれ勝、余行はこれ劣なり。……次に難易の義と

は、念仏は修し易く、諸行は修しがたし。……」

「まさに知るべし。上の諸行等をもつて本願となしたまわば、往生を得るものは少く、往生せざる者は多からん。しかればすなわち弥陀如来、法蔵比丘の昔、平等の慈悲に催されて、あまねく一切を撰せんがために、造像起塔等の諸行をもつて、往生の本願としたまわず、ただ、称名念仏の一行をもつて、その本願としたまえるなり……」

余行というのは、口称念仏以外の雑行で、これはいづれもむづかしく、精神的貧乏人にはムリなことである。

法蔵が念仏を以つて、極樂行きの切符にしたのは、先に引用したとおり二つの理由である。その一つ。なぜすぐれているかというところ「名号（仏の名）は万徳の歸する所」だからである。一切の功德、あらゆるアリガタさが阿弥陀仏という名にこもっているからである。第二に、なぜやさしいのか。「ただこれ、男女貴賤、行往坐臥をえらばず、時処諸縁を論ぜず。これを修するにかたからず。乃至、臨終に、往生を願求するに、その便宜を得ること、念仏にしかず……」であるからである。いつ、どこで、誰でもが、何をしていてもとなえられる。これほど、やさしいことはない。ことに、命のまさに終ろうとする、苦しい息の下からでも、念仏はとなえることが出来る。

しかも、この切符は、先ばらいの保証つきである。

「……しかるに阿弥陀仏、成仏したまいてよりこのかた。いまにおいて十劫なり。成仏のちかいすでもて成就せりまさに知るべし。一々の願むなくもうくべからず……」

「むなく、もうくべからず」に御注意願いたい。これこそ、運賃先ばらいの証換なのである。

三、偉大なる心理学者

「ものいわざれば、腹ふくるる」というコトワザもあるが、一日中、一人切りで留守番などしていると何か胸がつかえて来るようである。庭に遊んでいる小犬にでも、話しかけたりすることがある。ひとの心は微妙な働きを持っているもので、その作用は色々の形であらわれて来る。

「目は心の窓」ともいわれもする。また、一生懸命に考えごとをすると、自然と、くちもとがギョッと締められる。ポカンと口をあけていては、まともなことは考えられない。こうして、心に思うということは、色々のかたちでそこにあらわれるものであるが、念仏も例外ではない。心の底から仏を念じ、仏のことで心が一杯になれば、当然それが口に出て、名号をとなえることになる。また、「見仏三昧」といって、目に、アリアリと弥陀の尊像を見ることも

出来る。このことを、「念称是一」念ずることと、となえることとは一ツこと、同じことであるといつて、浄土宗義では、なかなかやかましい議論を生んでいる。しかし、常識からいっても「思えば口に出る」のであって、下世話に「いうに落ちずして、語るにおちる」ともいわれ心にもないことは、口に出ぬものである。

ところで、浄土宗の宗義からいうと

「口となうるも名号、心にて念ずるも名号なれば、いづれも往生の業とはなるべし。ただし、仏の本願は、称名の願なるが故に、声をたててとなうべき也」(和語灯録卷)といつて、口でとなえるのが本来である。これは、心で思うことを、切りはなして、ならべて見た場合、口でいう方がやさしいからである。心と口が一致するのが理想的だがそううまくゆくとは限らない。だから、いままでのすじ道をヒックリかえして、まづ口で唱える。そうすると、唱えているうちに、心もこれになづんで来て、仏を念ずるようになるという行き方をとるのである。宗祖の時代には「自己暗示」なんという、心理学の理論は知られてなかったのであるが、八百年前に、すでに、立派に、現代心理学の理論を駆使しておられるのである。このこと一ツをみても、宗祖の偉大さがしみじみ感じられるのである。(文学博士)

あとがき

◇本会の創立者真野正順先生はなかなかのお元気でいられます。先日お目にかかった際は、真新しいズボンをはかれて床に休まれていたせいか、昨年頃より顔色もよく若返られた感じでした。その時、「他宗にまけず、自信に満ちた力強い宗学者が少なくなってしまったが、浄土宗の真価を宣布するたのもしい宗学を樹立して欲しい」という言葉がありました。こうして将来にいき続けてきた点が先生の身上であります。

◇真野先生より三つ年長であられる中島真孝先生は、ご体格も角力の年寄を思わせる位で、ますますご元気です。この程ハワイ開教区監督としてホノルルに赴任されました。その壮行会のあった時、来賓から「このご高齢で」との言葉がありました。先生を目の前にしている、この言葉は実に似附かわないものでした。先生はご夫妻ともども赴任されましたので、この会にも当然ご同伴で出席されました。終って会場を出るとすぐ交差点があり、先生お一人ならさつさと横切られたでしょうが、奥さんをかばわれながら自動車をさけるお姿は、鷹が小雀を翼の下にしたようにも見え、実のところマゴマゴ苦心されて横断されました。主催者たる宗務所が老先生ご夫妻のお帰りに何故自動車を用意しなかったか、主催者の不親切に憤りを感じました。

◇鶴飼俊成先生は社会事業家としての大先輩の一人です。赤い羽根運動の発端ともいうべきお話を頂きました。

◇牧尾良海先生の中国綺談は、編集の都合で先月休載いたしました。が、今月から連載して頂きます。ご愛読下さい。

◇阿川文正先生は大正大学の新進講師で浄土学専攻です。今後もご後援願うことになっています。

◇安居香山先生は教育大学助手として長らく学生を指導されていましたが、今回は随想を頂きました。

◇竹中信常先生のご自坊隆崇院は先生ご自身の設計監督施工という一人三役で立派な本堂ができ、この程見事な擬宝珠（価百万円、重さ半トン）がのりました。先生は講演に放送にますますご活躍です。

◇吉野翠幹氏の第三話は、食糧不足で胃袋が小さくなり、空腹を感じなくなったという実話です。

「浄土」購読規定

一部 定価 金五十円

(送料 六円)

会費一力年 金六〇〇円

(送料 不要)

浄土 十月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便物認可

昭和三十六年九月廿五日 印刷

昭和三十六年十月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬 秀雄

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人顕仰会

電話東京三三二局五九四四番

振替東京八二一八七番

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ちやすい新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

日本一の生産・設備

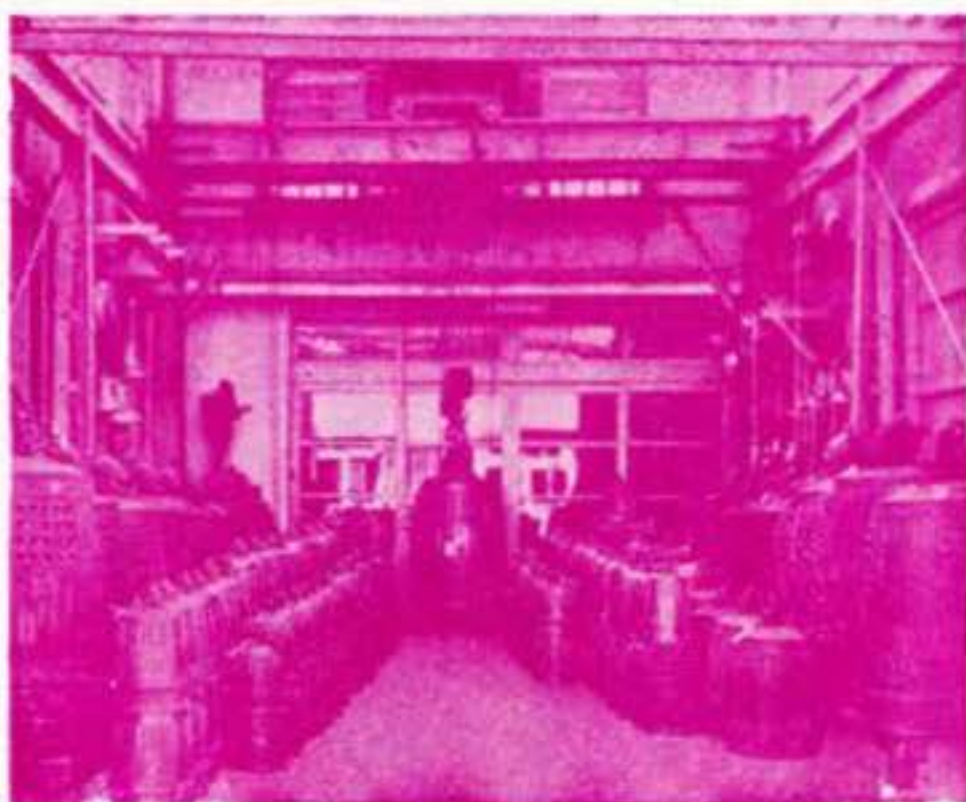
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音 響理学博士青木一郎先生

梵鐘界の權威 日展参事香取正彦先生
芸術院賞受賞



日本最初の黄綬褒賞

(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪(34) 8847番 本社工場 高岡市横田